

三味線堀前編
泉鏡花作

發端

路地口から、銀杏返をばさ／＼に、黄楊の櫛を横
つちよな、蓮葉らしい十八九　　女髪結と記し
たのと、歌澤なにがしと書いたのと、削り放しの貸
家札めいたのが、二枚、長屋の角に打着けてあるか
ら、いづれ其の梳手か、下地子　　ー　　ー　　らしいのが、
糠雨の中を袖笠もせず、紅い襷の二の腕白う、
「豆腐屋さん。」と呼びながら、溝板を、かた
／＼と駆出して、
「一寸、豆腐屋さん。」　　と甲走る。

「おう、」
と答へて、眞直に、細い路地口一杯に突立つたの
は、中親仁。荷の古びたのも、づぶ濡れで、笠に雫
のぼた／＼と垂れた處は、初夏の雨の夕のうそ寂し
い、路の邊の世渡草。但し元氣の可い聲で、
「いやア美しいの。」

「知らないよ。」

「はゝは。」と笠の紐の擦れるばかり、大口を開いて笑うて、

「私（わし）がのぢや間に合（あ）はないのかね、前途（さき）へ行く（ゆ）若い（わか）いのを呼びますかい。」

「何を（なに）さ。」

とツンと眞顔（まがほ）。

「何（なに）をつて、あれぢやねえか、豆腐屋（とうふや）、豆腐屋（とうふや）と、可（か）なりそれさね、の、大きな聲（こゑ）で呼びな（よ）さるもんだから、ちやんとお目（め）通（と）りに待（ま）つてます。待（ま）つてるものを、まだ喚（わめ）くだ。處（ところ）で私（わし）ぢや氣（き）に入（い）らなくつて、遠（とほ）くへ行（い）つた奴（やつ）を呼（よ）ぶのかと思（おも）つて、心配（しんぱい）するだね。」

「大き（おほ）にお世（せ）話（わ）ですよ、呼（よ）んだが何（ど）うしたえ。」と襷（たすき）を扱（し）いて、

「そんなに聞（き）いて居（ゐ）るんなら、早（さ）々と入（ひ）つておいでなね、いけ不精（ぶしやう）な。口（くち）の減（へ）らない親（おん）仁（ぢい）だよ、憎（にく）らしい。」

親仁は、けろりとして、天秤をがたりと置き、
「何は、奴に切るかね、八杯かね。」

「聾の早耳だつさ、人、そんなものが要るんぢや
ないわ、一寸あの、今日は午の日ですかつて。」

「ほい、油揚が御入用。午の日・・・午の日、
お午の日、狐の日だ。」 と笠が頷く。

「お師匠さんもね、祭禮紛れにうつかり忘れよう
としたんですつて・・・ぢや、二枚おくんなさ
い。」

と蓋を取る荷を覗きながら、狭い廂に雨を避け
つゝ、

「小父さん、午の日だの何んにつて、羊、申、酉、
戌、

と美しい指をばら／＼と折る・・・

「亥、亥でせう、猪でせう、小父さん、猪まで日
があるのに、何うして猫の日が無いのだらうね。」

フトこれに耳を留めて、思はず、其の紅い襷を熟

と見たのは、折から此處を通りがかり。

向うの黒板塀の樂書、お定りの相合傘、
珍らしく・・・羅馬字で書いたのを、と忍返を
見越しの柳が、雨にびしょ／＼と濡れかゝつた風情
と、もに熟と視めてゐんだ、脊のすなりとした青年
であつた。

骨太な奴蛇目傘を邪慳に擔いで、柄なりに出した
腕まくり、些といかり肩の凜々しい奴、紺緋の單衣
に焦茶の無地の扱き帯、これは縮緬をぐいと、而して
裾短で、高足駄。齒も爪皮も眞新らしいので、素
足なり、但し黒絹の紋付羽織で。

額は迫つて短氣さうな、眉のくつきりした、鼻の
隆い、目瞼が膨りと優しい、口元の締つた、細面で
色の淺黒い、頭髮の黒々と艶の好いのを、遣放しに、
無雑作ながら分目の立つた、柔かに初々しいのに、
帽子も被らず、唯見ると、鳥打らしいのを、引捻つ
て懷中に突込んだ、一ツ所に、銅貨銀貨取交せてく
わちやりと若干金、上首尾なれば紙幣が四五枚、新

らしいのも揉みくちやにして捻入れる。

お父上が月極めの分は、月の朔日、立處に羽が生えて、今残つたのは母君に強請つたお寶。

さて、其の、又かい、と眉を顰めながら、お居室の小箆筥、二ツ目あたりの抽斗から出さるゝ時の、はゞきゞや、其の人柄も可懐しき。．．．．．惡垂れたやうながら、人品が備はつて、人摺れ世馴れのせぬ風は、衿に襲ねた肌襦袢の汚れ目の無いので知れる。．．．．．衣紋も、瘦せた胸にしつくりと、雨の中には肌薄いが、雫の腕を傳ふのを、冷たさうな様子もなく、篠を亂して降らば降れ、額髪で受けむず意氣の、自から眉宇に顯れたも道理こそ、優しい瞼に色を染めた、此の面にのみ夕日影、暗々として且うるんだ、五月雨の夕柳に、微酔の可い機嫌。

娘の言に、一寸其方を、傘の柄越しに向いて、

「場所がらだ。」

と獨言．．．．．思はず目を合はす．．．．．娘が顔を背けたので、傘を横に、肩を隠して、柳を見

上げた。

「猫の日・・・」と呟いて、枝垂るゝ柳を
其儘に、寂しさうに俯向いて、柄の端に両手を添へ
つゝ、すら／＼と歩行き出す。・・・

其の間に、びしよ濡れの笠親仁は、蛭を穿るやう
な體で、小溝の上で油揚二枚――鳶も烏も出な
いから、此の豆腐屋に餘談はない。

又しても言ふやうながら、青年が、人柄な風を見
ると、何處で飲んだらうと大抵當る・・・鳥屋
か牛屋だ、と思ふと違ふ。實は蕎麥屋、の其れも可
いが、あらう事か、廂間でも二階はあるのに、帳場
近い處へ揚胡坐で陣取つて、

「極甘・・・」
などとしつぼくの抜、汁加減をちゆうと舌鼓。一

銚子倒したあとが、

「釜番の若い衆、釜振り・・・釜振。」と
賽壺を振る手つきで言ふ。平括の三尺、尻下りの兄

哥なら知らぬ事、何家かの若様ともありさうなのが、然うまで下つた擧勲をすると成ると、財布を探つた勘定も、早や母者が内證の分さへ遣ひ果した。弟御が野球買ふのを引奪り、妹君が孤兒院あたりへ義損の思召して貯金したのを強請つたものに相違ない。

洵や、邸は駿河臺、今は職を休められたが、世に時めいた陸軍の將校、子爵山科《一家、何某氏の嫡男松之助と云ふ、私立―――大學の學生である。

が、帽子を挫いで懷中へ、蕎麥屋の釜前で一合で、奴蛇目傘でぶらりと來ては、父君の名にも恥ぢよかし、……早い處が神田の松さん。

其れだと今時分、雨の中、此處等あたりを彷徨つて居る理由が知れた。……油揚を買ふ娘に聞いて、（場所がらだ。）と云つた……。場所は、下谷竹町を、堀へ近い……。向つて三條、三條の絲も寝絲に成つて、強く觸ると切れもしさうな細い横町。

界限に……近頃は仔細あつて中絶え
た……と言ふのは、人の愛妾。以前は、友達
の中にも浮名を流した、駿河臺の其の館に、文金の
高鬚縦矢の字であつたのが、情夫の名の松の翠にも
包まれず、あからさまに圍はれて、まゝならぬ世を
泣くのがある。

其の婦に、逢はねばならぬ事があつて、松さんは
三時さがりに、駿河臺の邸を出た。

出たが、眞書間罷向つて、

「居るかい。」

所の義理では無い。

時刻は夜、と豫て心得ても居る筈ながら、さあ、
行くと成ると、午餉も落着いては済まされぬ。

何とやらは魔多しで、出掛けに友達に寄せられ
もしては、と云ふ懸念から、一寸其處等へ散歩の體
で——尤も近頃學校は怠惰けて居る——館
の首尾も妙ならず、で、門前の長屋に蟄居の處、足

駄も自分で引摺んだ。

臺所に有合はせた傘を、濡れたまゝがつちり開いて、大手を振つて門を出た。日はまだ高かつたけれども、然うした處へ辿る身には、くわん／＼照らされるより、此の雨は詭へたやうなもの。

戀を知つた可憐さは、
・
・
・
早くから傘を窄めて、辻に兩國行きの電車を待つと、乗地に成つて驅けて來るのを、空に二三臺遣り過ぎしたのは、満員の所爲では無い。車臺に記した番號の數字を讀んで、丁か半かを占つた、智慧は女から着けられた。
・
・
・
敢て算盤を持たないでも、二進が一進で、二ツに割れると逢へぬ、と言ふ。

其の經驗は、婦の身が自由であつた時分から
・
・
・
何の馬鹿なで、故と偶數のに乗つた折は、他愛も無い、狐が風呂に入つた様な事が湧いて、何時でも不首尾を果敢んだので、今の境遇、尚の事。

で、よくは覺えないが、あと前へ一が竝んだのを

見掛けて乗つたのである。

却説、傘の柄漏も厭はず、さす方へ行かうとしたが、少い娘が花やかな聲、豆腐屋のぼやけた言語まで、下町を飾る彩色のやうに思はれた。

「猫の日か。」と思はず口の裡で繰返すと、其の尻尾の長いのが、ふはりと黄昏の雨の中へ、浮いて出たやうに見えたので。つい、背後を振り返ると、何か、もの思ひをしながら、虚気々と歩行いたから、間が幅つたゝめであらう・・・路地口に立つた其の娘の姿も無ければ、豆腐屋の笠も見えぬ。路が一筋、薄暗い中に、雨の艶で陰氣に底光りがして、且前後に人足が途絶えて、寂とした事は、自分が歩いた足駄の跡も、ひた／＼と着いて居さうである。

と立停まつて視めたが、黒板塀に濡れた柳、紅い襷を掛けた娘と――其の襷の色は椿が散つたやうに地に映つた――古笠を被つた親仁が、彼處に出會つて、偶然其處へ通りかゝつた事が、何か我

身みに取とつて、意い味みがありさうな氣きが頻しきりとする。

で、一ど度じぶん自分みが見るたゞけで、最もう其そのものは、世よに顯あれた用よ濟うずみと成なつて、ずしんと地ちの底そこへ沈しづんで行いつたかと疑うたがふまで、

と成なると、其その板いた塀べいに樂らく書がきした相あひ合あ傘がさも字じも、つとい通とほりなものは無ない。何どうやら自じ分ぶんに與あたへられた、秘ひ密みつの暗あん示じらしくも思おもはれる。

其それが羅ロ馬オマ字じであつたゞけに、等な閑ほざりに唯たゞ見みたばかり、讀よんだか、讀よまぬか、覺おぼえが無ない。

「待まてよ。」

或あるは此これから逢あはうとする、其その婦をんなと、自じ分ぶんの名なであつたやうでもあり、有あり觸ふれた徒いたづららしくも思おもはれるし、電でん車しゃの番ばん號がうと同おなじ數すう字じのやうにも考かんへられる。

「はてな・・・」と打う傾かたむいた時ときは、最もう踵きびすを返かへして、舊もと來きた方ほうへ引ひ返かへして居ゐたのである。

と、町の間は長かつた……殆ど咄嗟の隙に、
二個の影形の無く成つたのにさへ、七間八間とは隔
らなかつたやうに思ふのに……柳の風情も見
えながら、松並木から、恰も棒端を望むばかりに遙
であつた。灯が早や點れた。

其の灯の影が、兩側に赤い巴の祭禮の提灯。其れ
が、つゝと、今見た柳と、自分との距離だけ向うへ
幽に離れた時、やがて、見覚えのある、其の路地口
を右に、左に例の黒板塀に辿り着いた、が、間近く
成つた時分には、急いで、渠の歩行は慌しかつた。

が、日が暮れて暗いのでは無い。たら／＼と雨の
滴る、柳の露は蒼くも見えたに、相合傘は影もなく、
拭ひ取つたやうに消えて居た。

松之助は悚然とした。

媒酌人の無い戀路には、兎もすると、どんな人にも、
恚うした事は數々ある。

前編

—

町の角へ、淺葱地に熨斗を染めた幟などを閃めかいて、景氣を付けても、裏が草の生えた空地だけに、紺屋の看板ぐらゐに見えて、一寸寄席とは氣が着かぬ。

淺草小島町も、堀に近い、裏町を入つた處に、瀧と云ふ・・・時節柄、お湯屋の開業と聞えるけれども、なか／＼以て其の儀にあらず。古くからあるが、餘り人の知らぬのが一席ある。

一昨年だつて、喜の字の祝に最う一ツと言ふ處でなく成つた女隠居が、綿は見えても友染の蒲團の上、しゃんと坐つて、眞白髪の切髪、黒い鼈甲縁の眼鏡を掛けて、手つきの煙草盆の木地を氣にしては切で拭き、拭き、太閤記を読み、読み、這奴！云ひ効なきものどもや、と空板の小牧山を聞いて木戸番をした時分は、つはものどもの夢のあとに、蟋

蟀くが鳴なく寂さびれやうでも、忠臣ちゅうしんは二君にくんに事つかへず、貞女ていぢよ兩夫りやうふうに見みえずで、講釋かうしやくのお席せきで立切たてきつた、……
其その頃ころは確たしか水龍みづたきと云いつた筈はず。

悴せがれ……と云いつても五十ごを越こえた、其その男をとこの代だいに成なると、當人たうにんは恚かうした職業しよくげふにも似合にあはないお人好ひとよしで、此この頃ころだと、萬筋まんすぢのよれ／＼とある織縞おりじまの黒地くろぢの單衣ひとへに、小倉こくらの帶おび、銀鎖ぎんくさりふと太い處ところをだらりとして、胸むねが寛はだけようと言いふ骨こつで居ゐるから、何なんでも傍はたの言いひなり放題はうだい。

お媼おばあさんを葬はつむつた、旦那寺だんなでらの和尚をしやうまでが、今時講いまどきかうし釋やくでもごわすまい。同じ武おな士道ぶしだうにした處ところが、太平記たいへいきと忠臣藏ちゅうしんくら、楠くすのきも功かうを經へないと、……

「宜よろしいか。」

大石おほいしには成ならぬ理合りあひ。な、それ、つら／＼世相せさうを勸くわんずるに、浪花節なにははぶしに限かぎるでごわす！ と棚經濟たなきやうすんでの團扇うちはづかひ、法衣ころもの袖そでを捲まくり手に、賣うりもので接待せつたいの、胡瓜きうりラムネを、ぐい、と遣やつて説とかれたりで。

席亭忽ち其の氣に成つて、一兩年、御入來を仰いで來たが、近頃は薩張下火で、其れも思はしく客が來ぬ。と大石も屋根へ上つて、鴨居、柱が挫げさうに、土臺がぐらつき出したので、與一兵衛吃驚仰天し、二ツ玉を食つた體で、ぐつたり投首した處。

代が替つた浪花節の、其の新瀧頃から居候で、下足番の三次と云ふ、土地の遊人の三下奴が策を献じて、曰く、色ものに限るでげす。．．．．．兎角世間は色欲の二ツと申して、諸事此の事にとゞめを刺します。．．．．．と前座の假色を惡身に氣取つて。．．．．．えゝ樂屋のお三味線を拝借いたして、夕暮に眺め見渡すと云ふのを一振。月に風情を、と朱盆を翳して、東西！紅い處は霞の形などゝ受けさせ、ひよいと廻して黒塗の裏、月蝕と喚いて哄と言はせる。

「ねえ、旦那。」

本藝の衣紋流とは行かないでも、上潮で船が揺れる、とお盆をひら／＼と煽る如きは、私にだつて遣れますから、看板主は名ばかりで、天抜き掛行燈。

蕎麥そばのつなぎに山やまの芋いもなら、早い話はやしが下足亭げそくてい三次じで
間まに合あふ。

「是非ぜひいろものになさいまし、色いろのこつた、旦那だんな、
然さうすりや、講釋かうしやくでも、浪花節なにはぶしでも、つつくるめて、
五目もくに海老えびの大神樂だいかくらまで掛かけられます。」 「如何いか
にも成程なるほど、いや其その事ことだの。」
で、六月くわつのはじめから。

此處こゝで景氣けいきを附直つけなほして、比羅びらも幟のぼりも新あたしく色いろもの
を掛かけ出だしたが、場末ばすゑの小席せうせき、固もとより浪花節なにはぶしさへ、
潛もくりの眞打しんうち。田舎廻あなかまはりの藝人げいにん徒合てあひ。成ならば、徒士町あかちまち
の鐵道てつどうを應用おうようして、江戸えどは素通すどほりに熊谷板橋くまがひいたばしと、云い
つたのでなければ掛からぬ。

落語家はなしかとても右同斷みぎどうだん、自分達じぶんたちが高座かうざで饒舌しゃべる、弟で
子の又また弟子でしの其弟子そのでし、賑にぎやかしの御機嫌ごきげんを伺うかがふ西洋手せいやうてじ
品なも、歸天齋きてんさい正十處しやうじふところで、太夫身支度たいふみじたくは兵隊さんへいたいの古ふる
服ふくを以もつて仕つかまつる。

また無理もない。大入叶正面の行燈に、木戸が今
時金七錢。

時に此の比羅を掛け直した六月は、三社様の祭禮
で、此の邊から佐竹一圓、鳥越から下谷竹町、徒士
町向柳原、佐久間町一二三丁目をはじめ、三區に渡つ
て、今年は影祭ではあるが、例年其の賑一方ならず、
と古くから節用にも記してある。

手の届かぬ遠い町へは、神輿が渡らうが渡るまい
が、近所合壁は年に一度、小兒たちが小遣の、餡の
お錢の遣ひ時。

此れを絞れ！ 其上、小兒の評判は、大人へ廣
告。商買に抜目のない名古屋ものゝ持込んだ躑躅人
形は、区内の小學校へ半札を配つた、あの、手際を
御覽じやつたか拝見あつたか、と又候甚句で囃して、
下足の三次が計らひで——此の界限、材木屋の
藏の角、染物屋が埒の前、學校の裏門などを足溜り
にして餡を賣る、荷物をのこ／＼と運ぶ工合が、鯉

節の蟲に肖た、甚四郎と言ふ．．．もそりとぼ
やけて影法師のやうなお爺。二錢が賣れた景物には、
うつし繪の影芝居。．．．小兒衆御存知の旨
いもので、田之助の聲は齒が抜けたが、．．．
落人の旅の女が、山深い辻堂に病倒れて、狼に噛ま
れる處の、いや、其の筋に響く遠吠などは、うゝ／
＼と齒莖を切るのが、黒掬子へ血走るばかり、物凄
く眞に迫る。――

甚四郎爺を高座に上げて、精々取立て御慰みに備
へた上、前側の小兒達には、無代で飴をしゃぶらせ
る、お剰に小人半値段、と言ふ。．．．

「何うです、わんぱく、お茶ツぴいの巾着は皆絞
つて、自働器械の蜜柑水なんざ、前の溝へ打覆けさ
せてお目に掛けます。處で、飴賣甚四郎では威かし
が利きませんから、うつし繪、影芝居、．．．
鸚鵡樓甚叟さね、旦那。まだ些とあくどいやうだけ
れど、これへ、狸の面を被せて、一世一代と遣つゝ
けまさ、大人だつて吃驚しませう。」

「むゝ、成程、」

と柱に凭れて、樂屋から茶を持って一ツ目小僧が出て來さうな、堂々つ廣い、日中の相談。席亭は眞面目な人で、

「小兒だましましたの、まづ。．．．しかし景氣は附かう、お祭を見込んだり。あの、爺が高座へ出るのは、如何様一世一代だで、表看板にいつはりはなし、とこりや出來た哩、三次。」

あとはしかし、あり來りの顔觸れで、其れで客が來ようかの。」

「其處です、旦那。」

と三次此の機會に大きに氣勢つて、頤と一緒に、拝むやうな手つきで乗出す．．．下足の方が、椅子に掛つて、旦那は、と見ると、ぼん／＼時計を掛けた下．．．がツち／＼が小さな天窓に響きさうな處に、孤兒院の錢函を頂いた體は、如何にも寂しく、其の柱にぐつたりと抜衣紋。例の銀鎖をだらり、で、時々じろ／＼と正面の高座を視める。

「飴屋の景物で、一番しやぶらせるなんぞは、太

神樂の撥ぢやありませんが、ほんの前藝でさ、甘い
もんでさ。

處で、甘いにも辛いにも鹽ぱいにも黒いにも白い
にも、ね、私が手加減唯た一ツで、ありつたけの客
人に、涙と涎を一緒に流さして、とろりと味醂蒸の
あとが薄鹽、後生だ、命だけは助けてくれ、もう何
うも堪らねえ、と云つた料理があります。

旦那・・・竹町の夏の富士。」

と椅子を突退け、三次、怒肩をして、しやつきり
蹲む。

「ふむ、」

と間伸に鼻毛を見せて、席亭は仰向いて、

「三國一か。」

「其れさ、旦那、下谷一番。ヒイ、」と笛のや
うな聲して咽喉を鳴らす。

席亭はまんじりと、

「はての。」

乗氣の三次は、席亭の窪んだ頬を、平手で撫でな
いばかりの意氣込。

「ねえ、旦那、最う相談をちゃんと極めて、段取
が出来てるんで……これなら一言も無え、御
大人方がとろりとしませう。」

「其りや、とろりともしようだが、」と席亭は
氣の無い顔で、
「しかし、些と甘過ぎるの。」

「串、串戲云つちや不可ません。今も私が云つた
通り、甘えにも辛えにも鹽ツぱいにも、お前さ
ん、……」

「はあ、近頃は何か、些と鹽を利かせるかの。」
「へい、」

と言つたが其の鹽を嘗めた面で、

「何が、旦那？」

「何がつて、お前、鹽梅よしの事だらう。」

「當前さ、だから私が然う言つてるんで、甘えにも辛えにも、此の上の鹽梅なし。それ、御大人がとろりと……」

「とろりは可いがの、飴のあとへ又甘酒ぢや

あ……げい、」

と噫をして、

「お彼岸の配りものが支いたやうに、五目の上へ牡丹餅にや成るまいかの。」
と席亭一代の警句を吐く。

「確乎しておくなさい。私あ旦那、おためを思つて眞面目に話しをしてるんです。……甘酒ツて何うするんで。」

「だつて、お前、竹町の三國一だと言つたらう。」
「申しました、へい。」

「あの、鹽梅よし甘酒屋を掛けようと言ふ相談では無いのかの。小兒衆には飴さの、御大人方にも祭禮の事だに因つて、」

「甘酒進上……あ、あッ、」

と開いた口を、少時して、

「確乎しておくんなさい。南瓜が接待をしやしま
いし、甘酒屋を高座へ上げて可いもんですか。私が
言ふのは、然うぢや無えんで、……旦那、そ
れ、竹町の夏の富士。」

「夏の富士、……はての、山川白酒か。」

「焦れつてえな！」

と煙管を握んで、

「お雪さんの事ぢや無えかね。」

「あゝ、清元の師匠かい。」……成程、と
ろりとした様子、席亭は早や莞爾りとする。

「如何で、如何で、旦那。紅絹の糠袋を細くかゞ
つた三の糸を皓齒か何かで洗髪の透通る耳朶の白い
のを、濡手拭で一吋壓へて、素足に駒下駄、すつと
通る、後姿なんと来た日にや、三味線堀から清水が
湧いて、佐竹原が玉川でさ、兩側の屋根へ杜若が咲
く騒ぎ。」

それ、見える、と云ふと、路傍へ人垣を造つて、
壓合ふから、露天の古足袋屋の婆さんは、日除の蝙蝠傘を疊むんです。馬力も留まつて、走るものは郵便の配達ばかり。柳盛座の出方なんざ、くると背向きに成つて、見物を木戸口へ呼出します。

え、旦那。

白襟に紹の紋着、博多の丸帯か何んかで、高座へ上つて、と轉進へ白魚がかゝつて、緋縮緬の背負上げを斜つかひに象牙がびたり、小指が反つて御覽じろ。目を廻す。掃溜。え、ま、ものは譬へですがね、其の鶴どころの騒ぎぢや無い、別嬪の彗星、七十五年の天津風で、天文臺でも驚きませ。

席亭は咽喉から手が出さうに、口を開いて聞いて居たが、

「然う行けばの、借金して、芝居を借りても遣つて見たいが、え、三次、だつてお前、お雪さんには、何があるかの、れこが、」

と親指おやゆびをぬい、と出だして、慌あわてたやうに引込ひっこめな
がら、

「然しかも些ちと大いかいがの、．．．．え、噂うわさをして
も崇たりさうな、蝮まむしと云いふ鎌首かまくびに曲まがつた奴やつ、の。」
と、木戸きどの暖簾越のれんごしに戸外そとを透すかした。

四

「其處に實も蓋もあるんです。」
三次は腹掛の底を探つて、勿體らしく巻莖を一本
拔出し、

「實はね、．．．．旦那、こりや、お雪さんの
其の親指ものゝ發議なんで、．．．．竹町の三角
の兼床で逢つた時、　　ー　　なあ、三次、お前ン許
で今度五目を掛けるんなら、ものは相談だが、一ツ
お雪を出して見ないか。彼奴も何んだか身體の所為
で、半病人で鬱いで居る。些とは然うすりや引立つ
て、元氣も附くだらうと思ふが何うだい。尤も云ふ
にや當らないが、話は早い方が可い。此方から押賣
だ、歩だの車代だのと．．．．第一道は近し、そ
んな心配させぬ處か、親類づき合をして居るだけに、
お前にや蕎麥でも驕つて、半纏の一枚も着せようし、
席亭へも友だちの顔を揃へて、ずらりと比羅を張ら
うぢや無いか。　　ー　　

と恚う言ひまさ。ね、牡丹餅で頬邊だ。」

「はての、」

「私も考へました、……旦那の前だか、親指ものはね、お雪さんにや、意地も、我慢も無いだけに、可恐い妬き方で、あゝしてまあ、子分子方や附合仲間の繩張内へ封込んで、金子の柵、圍つては置くものゝ、陰の噂ぢやお雪さんが、些とやそつと撲ち打擲をされたつて、なか／＼何うして自由になるもんぢや無いんですからね。」

「的切、情夫があるに違え無え、と云ふ處で、お茶湯日だつて淺草へも出しやしません。湯へ行くつてはお前さん、向うの鍛冶屋の職人徒、黒鬼のみる目、かぐ鼻が、鼻薬を貰つて見え隠れだ。」

「可恐い。十町四方は溝端へ出る露店の莫蔭の下、堀の舟の苦の中まで、鹽を撒いて居るんですぜ。お妾を淨めのために。何うして高座處か、近頃は手紙のつかひでも出来さうな年紀と見ると、女の子だつて弟子も取らせ無えのが、何んだつて、不思議な事を言出したらうと、一寸聞くと可訝いんです」

が、……人情だね。

人情だか何んだか知れないけれど、無事なやうでも、然うして藏つてばかり置いたんぢや、あれが、と皆が指を銜へて、畜生め、と言ふのも七十五日。竹町の別嬪が――横井庄兵衛――ねえ横庄の持物だか何んだか分らなくなりますから、……・・それ、電車の中までも廣告を出して、秘佛を高座で拝ませて、随喜の涙を流させようと云ふ腹でさ。

其とも疑ぐるに切はありません。別に怪しい素振は無い。無いとして、深い、分らない、情人がありさうで危険な處から、一番法をかへて、伽羅でも燻いて、奥山から鹿をおびき出さうと言ふ見かもしりません。

が、そんな事は先様御随意。此方は掛けてくれる比羅を數へて、御酒肴、半會席、上等と云ふ處を、御馳走に成らうぢやありませんか。」

席亭は唾を嚙んで、楊枝も使はず舌鼓を打つた。

こゝで極つて、景物が其の鸚鵡樓甚叟。客分が別
看板に化粧して、天地紅で張出した、清元雪江、
―― 當席より出演仕候。

其の雪江の身の親指もの―― 横井庄兵衛。横
庄が顔で、熨斗進上、新瀧亭丈へも、一夜城の如く
張出して、柳盛座の屋根を遠見に、大銀杏の梢と相
對して、活動寫眞の看板如きは、眼下。旗指物
を翩翻と紺屋の溝を挟んで、湿地低い場所に翻す。

さあ！ 入った。

席亭も久しぶり、朝湯へ入つて、鬚を剃る、額
際も照々と、木戸行燈に輝いた。

二日目も雑と一杯、三日目も先づ一杯、四日目に、
どか落ちて、辛うじて三分ぐらゐ、五日目がばら
／＼で、六日目が島流し、平判官廉頼、俊寛僧都、
鬼界ヶ島に寄る波の、濁つた疊も荒海同然。

一人の所爲ではよもあるまい、が、比羅ばかりで、

お約束やくそくの雪江ゆきえこと、お雪ゆきは、はじめから出勤しゅつぎんせぬ。

ト其その七日か目の事ことである。

五

晩^{ばん}方^{がた}急^{きふ}に天^{てん}氣^きが變^{かは}つて、一^{ひと}時^{とき}車^{くるま}軸^{じく}を流^{なが}した、雨^{あめ}は宛^{さな}然^{ながら}夕^{ゆふ}立^{たち}の模^も樣^{やう}であつたが、濡^ぬれた柳^{やなぎ}に紅^{こう}玉^{ぎよく}の日^ひもさゝず、上^{あが}り際^{ぎは}がじめ／＼と其^そのまゝ地^ぢ雨^{あめ}に成^なつたらしく、夜^よに入^いつてのじと／＼降^{ふり}。

前^{さつ}刻^き大^{おほ}粒^{つぶ}なのが激^{はげ}しく不^ふ意^いにざつと來^きた時^{とき}、小^{こう}路^ろの角^{かど}に荷^にを下^おろした、びら／＼の風^{ふう}鈴^{りん}賣^{うり}が、硝^{びい}子^{どろ}をちやら／＼と、電^{いでん}のやうに閃^{ひら}めかして、氷^{こほり}屋^やの簾^{すだれ}摺^すれに駆^{かけ}出^だすのを、腕^{うで}まくりして見^み送^{おく}りながら、

「状^{さま}を見^みやがれ、看^{かん}板^{ばん}前^{まへ}へ荷^にを下^おしやあがつて、入口^{はし}を塞^{ふさ}ぐから可^い氣^き味^みだ。・・・」と下^げ足^そ番^{ばん}の三^じ次^じが装^{もり}鹽^{じほ}した手^てを拂^はいて言^いつた。――

此^この二^に三^{さん}日^{にち}、同^{おな}じ處^{ところ}へ日^ひ暮^{くれ}方^{かた}に來^きて荷^にを下^おろすが、入^いりの無^{なし}い新^{しん}瀧^{たき}の旗^{はた}差^{さし}物^{もの}は、氣^きの所^せ為^ゐか、實^{じつ}際^{さい}、風^{ふう}鈴^{りん}屋^やの硝^{びい}子^{どろ}に蹴^け壓^おされて、景^{けい}氣^きに點^つけた提^ち灯^{ちん}の灯^{あかり}も、其^その釣^つ葱^{しゆ}の葉^はがくれに薄^{うす}暗^{くら}いやうに見^みえたのであるから。

「旦那、これで、さらりと霽りませう。路も泥濘りませんし、蒸暑かつたのも、今の一降で薩張して、そよ／＼半纏でも羽織らうツて陽氣です、今夜は承合入りますぜ。」

と大元氣で、旦那、祝つて、三次は白玉の向う顧巻。雪輪の中へ、念入りに雪と染めた、今度の出勤に就いて横庄が配つた。新しい揃ひの半纏で、カラ／＼ガラんと尻刎ねに松竹を捌いて、最う御膳が出た、食ひなせえ、と云ふ身で構へる。

やがて樂屋で、序の太鼓が ドロンと鳴出すと、席中の古疊が、ひし／＼と縁を揃へて、一一齊に武者震して人待つ氣勢。

お園と云ふ銀杏返、中形の浴衣に前垂した、當席の娘が、女中一人と奴を使つて、こゝを預る。・ ・ ・大藥罐の下には、未だ火を入れない炭の色が黒々と、女中の顔の塗つたのが白く目立つた。

最う陽氣だから、軽く済ます、燧火を入れた火鉢

が、碁盤の目に凸凹と隅を仕切つて、蒲團の小山に
棚田の形。・・・一粒萬倍に實れば可いが、客
が来ないで、戸障子襖、疊の破目ばかりが目立つ
と・・・燧火を入れた火鉢と蒲團が、新瀧に入
つた龜裂つたけに、べた／＼と貼る膏藥に見えてな
らぬ。

いや、鶴龜々々。

三次の懸聲も幸先の可い、其の七日目の宵のほど。
木戸行燈も颯と新しく、灯の色の白いのが、薄黄色
にとつぷり暗れて、あか／＼として来るまで、又し
てもい一向に客が来ぬ。

木戸に坐つた席亭が、行燈に照れて、抜上つた額
を背けて、・・・横顔で氣にし出した。

「何んだか、ぼた／＼と雨垂が軒を傳ふやうだが
の、降つて居るらしいがの。」

土間の椅子の前に突立ちは突立つたが、當なしの
掛聲は中弛みがしやうでは無いか。突張らかいた胸

も窪くぼんで、腹掛はらがけに皺しわの入いつた三次じが、
「止やんでませう。」と氣きの無ない返事へんじ。

「だがの、頻しきりにぼた／＼する．．．．．屋根やねも漏もらぬが。」

と、氣心きしこころで變へんに暗くらい、天井てんじやうを仰あふいで見みて、

「雫しじくが頸首えりくびへ染しむやうだ．．．．．晴はれたとは言いふけれど、お星様ほしさまでも見みえるかの。」

「然さうですね、」

と三次さんじも半纏はんてんの肩かたを狭せまく、悄氣しよげた兄哥あにいに成なつて、
簷下のきしたへのつそり出でたが、

「入いらつしやい、」と一ツ喚わめいて、首くびを窺すくめた。

「ちよつ角かどの氷屋こほりやへ入はりやがる。旦那だんな、恚かう其その何なんですね、入いらつしやいも打附ぶつづからないと、向むかうの屋根やねを飛越とびこしますから、ドント應こたへて胸前むなさきへ響ひびきますね。」

其その向むかうは仕舞屋しまたやで、宵よひから寝ねるから、四邊あたりも構かまはず、高聲たかこゑで、

「ぬかあめ糠雨です……だんな旦那。」

「あゝ、わる悪いな。」

「うちと云ふ内にも、また又びしよ／＼とき來る奴やつです。」

「客の出入を留めると言ふ、厭な雨だの。」と
 勢の無い事を言ふ。げんなりした席亭の顔は、平時
 のぢぢむさだと、まだ其れでも、皺に成つた紙幣を
 用意して居さうだけれども、こそげるやうに髯を剃
 つただけに、頬も痩せて、行燈の横に霜げて見え
 る。・・・

「えゝ、三次、戸外はどんな景氣かの。」

「角の氷屋なんざ、大したもんでさ。人をつけ、
 此の薄寒いのに、何うです、旦那、浴衣がけの新姐
 が、團扇使ひで雪の山盛を囓つてら、何うでい。」

と拗身になつて、ぐいと反つたは可かつたが、

「おゝ、冷え。」 掌で首筋をびつたり撫でて、
 軒の雨垂を睨んで引込む、と廂に打つた揃ひの提灯
 に映る額が、酒氣が無いだけに、祭禮の宵を仇白い。

席亭は眉を顰めて、

「陰氣だの、涼風が起つて秋雨が降出す……」
山の手の場末へ行くと、得てこんな祭禮があるが、
下町にはつひぞ覚えぬに、なあ。揃の提灯だとして、
然うだ、竹町徒士町、鳥越邊は残らず巴が紅だのに、
何んで三味線堀を境にして、九番地先から私方が町
内、今年に限つて眞黒に彩つたらう。……向
うと此方で張合ふ氣かの。何んの張合はずとも
よ。四海は兄弟と云ふに、他ならぬ御祭禮。四民平
等に睦まじくするが可いに。何うだい、赤い方は通
りがかりに見ても赫と陽氣だにの、ものゝ黒いのは
陰だとしてある。それ陰よ、陰な。何につけても變
に滅入つて、何んとなく引立たぬ。見なよ、それ、
黒い巴が氣の所爲か、白張へ出した卍に見えるが
の。」

「え、」

三次もうそ寂しい上目づかひ。ト茫乎と薄い灯を
並べたのが、糠雨に濡れ通つた土間へ映つて、巴の
影が黒い蝶々、掃寄せた霜のやうな装鹽の上を、ふ
は／＼ふは／＼。

「不可え、」

と思はず咳いたが、席亭の顔を一寸横目で、附元
氣な頓興聲。

「しゃあい、しゃあい、しゃあい、しゃあい、」と宵暗
を突走る。

「あゝ、入らつしやつたかの、客かの。」と門
を透かして、席亭間の抜けた事を云ふ。

三次弱つて、

「追着け入りますよ、……まだ宵です。然
う氣落ちをしちや遣り切れません、何処の國にかお
前さん、入らつしやい！と言や、入らつしやつた
かつて、木戸口を探すお席亭があるもんです
か。……精靈棚の笹藪から棚經の坊主を覗く
やうだ、あゝ鶴は千年。

餘り滅入つた事を言ひなせえすもんだから、私
で釣込まれる。潔排だ、眞個に、串戯ぢやありませ
んぜ。

今に御覽じろ、雪江姉さんの婀娜な姿が、佐竹橋へ、香水の薫床しき鬢の毛で、暗にも目立つてすつきりと顯れると、三筋四筋と彼處で落合ふ、町々を一束ねに、下谷中の客を帶の端へずる／＼と引いて來らあね、御安心だ。」

と少しいきる。

席亭は矢張り、まんじり、

「其の、お前、肝心な看板主が、一度も出勤ないから事起るがの。前へ金を貸した藝人衆だとて、病氣と云ふには勝たれぬに、車代まで向う持ちと言ふ、道樂で出す妾だもの。動きが取れぬ。．．．．．話が甘過ぎると思つたれば、案の定、なあ、」と

ずり抜けさうな、ぶらり手の頤杖なり。

「其りや無え、そりやありません。言出したのは先方にしろ、旦那の前は私が引受けたんだ、私も三次です。」

で、引擦ると、腹掛の中まで濕氣が來たか、掴出した燧火が一寸點かぬ。．．．．邪慳に挫當ると手應もなく折れたので、舌打して土間に擲る、と悪く目立つて、たまさか客でも人らうもの

なら、ひよいと薪まき雜ざつ棒ぼうに化ばけさうで、提ちやう灯ちんの影かげでひ
ら／＼と動うごく形かたち、行あん燈とうにはりつけた燈とう心しん屑くづの躍をどるに
似にたり。

七

三次は氣がさしたか厭な顔色。其の燐寸の軸を、
草履の尖で椅子の下へ揉込んで、

「ねえ、旦那、私も何んだ、」と漸と火の點
いた巻苳を、銜へながら、饒舌りながら、ぢれ込
でせつちやうしたれば、齒に嚙んで濡れたのを、不
味さうに、ちゆうと吸ひ、

「不斷は不斷、恚う云ふ場合だから昨日、一昨
日、……第一席の信用に係はるんだ、何うし
ておくんなさるつて、横庄に談じつけた、ね、御存
じでせう。」

實は病氣だつてえんだが、晴れがましいとか、何
んとかで、寄席へ出るが不厭だと見える。……
手を代へ品を替へ言つて聞かしても、頭を掉つて六
晩と抜いたは、新瀧の迷惑、委細承知だ。何んの、
泣いたつて喚いたつて、己が自由にして居る婦人よ。
三次、合點だ、可し、見やあがれ。

とつて、お前さん、横庄が遊び場の、あの山田屋

の帳場の處で――晝間私が談じた時――灰
吹をぐわんと撲つて、凄まじい剣幕さね。

じたばたすりや引締つて、戸板に載せて擔込まあ、
高座で澁くつてゞも見たが可い、どてつばらを抉つ
ても、きやアと勘處を上げさせる、と恚うです。

尤ね、佐竹界限、掌掴みの親分だが、へえ、可愛
い人にや、へえ、なんのと、然も／＼お雪さんが自
由にや動かねえやうに、・・・私が煽りつけた
もんだから、一つは躍起となつたんですぜ。ねえ、
旦那、戸板にのせて、とまで言ふんですから、今夜
来る事あ承合の西瓜、血を見るよりも明かなんで
す。」

「あゝ。」
と手で壓へて席亭、頭を行燈のうしろへ曳いたは、
目眦の下つたのを隠さうため。

「手、手荒な事をしてくれな。繪に描いたやうに
美しい、竹町名物の一軸だに、拂の尖が觸るのもい

ぢらしいがの、．．．．無理に出てもらつて、また、高座で煩らひでもされては成らぬ。」

「氣の弱い、何ですつて！ そんな事を言つてた日にや、梅雨時なり旦那、疊に草が生えらあね。」

「むゝ、其れも然うだかの。」 と滅入つたが、

黙つて溜息を深く吐くと、

「や、高座で又癢を起したかい。」 ー
と呟いて、疲れた面色。

「あ痛、あ痛々、あ痛々々痛。．．．」

時に裏悲しい婦の聲が、野を隔てたやうに、奥深い高座の上から、悪く氣取つて幽かに響いた。

「しゃあい．．．」 と紛らかしの筒抜けに喚くと同時に、三次は打附けるやうに椅子に腰。首も肩もぐつたりと、両手を下に揉手をしながら、苦笑ひして、

「東西。」

と極低聲。

「鸚鵡亭甚叟、御出勤だ。」

然矣、時刻を違へず、飴屋が高座へ出て居るのである。

「あ痛々々、痛、あ痛々々。」と、お定りの旅

の女中が、山路で癩に悩む處、一流評判の影芝居。爺の假聲眞に追つて、就中、席亭の胸を刺す。

「入らつしやあい。」と又紛らかして、黒い巴

が軒に竝ぶ。・・・提灯の間から、漆のやうな路地を覗いて、

「旦那、何時です。」

「然ればの。」と俯向くと、胸の寛かる件の萬筋、ぶらりと扱いた銀鎖、克明に時計を見て、一つ、くるりと廻して熟と又針を視めて、

「八時半よ。」

「八時半。・・・」と鸚鵡返しで、三次血聲

を絞しぼつた。

「しやあツ、しやあい！」

「ほう、ほう／＼、」と響ひびいて聞きえる。・・・

・皺しはが枯がれた變おんじやうな音聲。

「あれ、狼おほかみを遣やりやがる。」

と席亭せきていと目めを合あはせた。・・・三次遣切じやりきれず、

飛上とびあがるやうに突立つきたつて、

「入いらつしやい。」

變へんに其その咽喉のどぼとけ佛ほとけをびく／＼とさせるのが氣取けどられる。高座かうざの飴屋あめやが狼おほかみの聲こゑに、後髪うしろがみを引ひかれて、席亭せきていは頸首えりくびから釣込つりこまれさうに滅入めいつて、口くちも利きかなかつた。少時しばしして、

「三次じ、其その、どろ／＼と何か水みづでも出でたやうに響ひびく音おとは何なんだらう。」

「え、」
と目めが覺さめたやうに、しやつきりと腕うでを組くんで、

「あゝ、前まへの溝とびです。宵よひのどしや降ふりが三味線みせん堀ほりへ落おち込んで、方々ほう／＼へ捌はけるんでさ。成程なるほど、凄すさまじい。川かはが出来できたやうに、くわう／＼言いひます。……
鳥越とりこえの窪地くぼちなんざ床ゆかへ上あつたかも知しれません。柳盛りやうせい座いざの奈落ならくへ河童かっばが潜もくりさうな晩ばんですなえ。」

「餘所よその河童かっばは構かまはぬが、あれさ、又また、内うちで……狼おほかみの唸うなりを遣やる。……問々あひま／＼には絲いとのやうな女をんなの泣聲なきこゑ、あゝ、可厭いやだ。何どうやら溝とびの

なが 流が溪河のやうに聞えて寂々として来た。今の間に
きばやし 樹林が、のさ／＼と生茂つて、屋の棟へ蔽被さる氣
がして成らぬ。草ぱう／＼の前兆ではあるまいか
の、の、の、の、の、三次、

「しやあい、しやい、」と、下足番は聞かぬ
振で、横を向いて又喚く。

「こゝへ悪く入らつしやれば、山伏か旅僧だが
の、の、の、の、天井裏をぐわさ／＼と、凄じい、あ
の音はい。蛇が鼠を追廻すだ。やれ又狼の聲を出
す。の、の、の、の、飴屋は一體誰を相手に影芝居を遣つ
て居るな！ や、や、きやつ／＼と云ふ、猿の啼く
やうな、あれは何んぢや？ の、の、の、の、の、の、」

席亭は、恰も孤屋の納戸を覗く形で、客の無い空
席を氣味悪さう。黒雲が低く下つて、岩角に野茨が
白く咲いたやうな、背後の暖簾を、億劫らしく見返
るトタンに、生暖い風が、堂々つ廣い野疊から颯と
吹いて、ふはりと暖簾が其の天窓に被る。

「わッ、」

と言つたが、居寤まつて、席亭は目をぱち／＼。唯見ると、鹿ヶ谷の杉の立樹の如く、影も薄暗く寂と立つ、中柱を見につけても、席亭は今度の企謀を苦々しく思つた。――

高座は、と見れば、十燭の電燈が左右に二ツ。何うやら餘所のよりも、光が弱く、陰氣に壓されて朦朧とある眞中處、最う一にて客座へ踏出しさうな端近へ、色の黒い法然天窓が、渦巻を墨でなどつた飴の箱を膝許へ、大道を引いて廻る、車だけ外したなりの、影芝居映繪の例の舞臺を、ぐわさりと直して、悄乎と構へた體は、先祖が魂棚へ押直つて、山高きが故に貴からず、と實語教の素讀をなされる容體。折目怪しく、襪の延びた嘉平治平の襠高は、三途河の婆に一夜が損料と見えて、其の實、席亭が自分のを出して間に合はせに貸した代もの。

何やら淺葱地の手拭を、可厭な手つきで瘦せさらばへた胸先へ擦れ／＼に釣下げて、ぶる／＼と振るのが、鬼火が燃えるやうに翻々と黒く揺れる。

これを見て、きやつ／＼と騒ぐのは、五六人の
子供客で。其れも、きちんと坐つてゝも居る事が、
高座に手を掛けて中腰で蹠の眞黒なものもあれば、ぬ
いと立つて、此の陽氣に袖口へ手を引込みますいぢけ
たのも居る。・・・目を擦る、鼻を撫でる、中
には、なは飛びの足つきで、ぴよんと刎ねるのさへ
ある。

はてな？

「これい。」と席亭、それでも客が席に居ると
思へば、木戸で神妙に聲を密めて、茶番に眠さうな
女中を呼ぶと、此のまた白く塗つたのが、鼻が尖が
つて狐のやう。

「これい、小兒衆は何處から入つたい、木戸は通
らぬであつたがな。」

「お園さんに強請つて、裏口から入れて貰つたん
でございます。それと、あのそれからあの、中人の
時口上言つて、齒磨を賣る孤兒院の小僧さんが二人
居ますわ。」

と前垂を揉んだり撫でたり、誰も叱りはせぬのに、

上^う目^はで^めじ^ろり^り。

「お園は何うしたの。」

「あの、前刻奥へ行らつしやいました。」

「ふむ、」と寂しい顔をして、席亭は其處等を

みまは
三し、

「萬吉は？」

「萬どん、おい！」と白粉の面なのが、薄汚い

爪尖で、古畳を丁と遣る、と火の氣の無い箱火鉢を

楯に突伏して睡つた奴が、口を開いて、むつくと起

き、

「入らつしやい、」と唐突に甲走つて、火鉢と

蒲團を両手に搦んで、當なしにくるりと廻つて、き

よんとんとする。大掃除の夢見た顔色。

高座前の小兒たちは、件の奇聲に、一齊に木戸口
を振向いた。

「傍見をせまい。」と、鸚鵡亭飴屋の甚

叟。……此の四五日の日當で、米代は十分な

り、酒錢にも事缺かず。……飴は自分が持出

して施行の見識なれば、鷹揚に小兒を制して、黒捺子の舞臺傍へ手拭を縦に置き、乾びた咳をなし、

「まだ宵ぢやほどにの、大人しうして、ゆるりと遊びやれ。これ、學校へ行つて、先生の話を聞くにも、傍見をしては叱られようが、騒いでは成らぬぞ。はゝゝゝは。」鼻の下をだるげに擦つて、額に皺を刻みながら、怪しからず上機嫌。

「尤も、寄席と學校を一つにする奴も無いかい。……其の代り、その、先生様は飽はくれぬ。芳うて齒に付かず、甘いのを樂みに、しつぱりと御覽じろ。はッはッはッ。」

さて、小兒衆や、馴染がひぢやに、……私道具立を見せて、木頭をチヨンとやれば、早主たちが方で狼の口眞似をさつしやる。あれはの、地體おほかみと云うてお山の神ぢや。……處に因つてはお犬とも稱へて、其れは早、世にも恐しい通力自在なもので、この神と梟鳥は、笏、木精と同じ事で、人が聲を眞似れば負けずに鳴く。

獣けだものでさへ、氣きのある處ところ、人間にんげんの私わしが狼おほかみの聲こゑを出だす、
……其それを主ぬしたちが真ま似ねるに因よつて、つ
い此この方ほうでも釣つりこ込まれて、ほうほう、などと遣やるわ
い、はッはッはッ。

したが、私わしが映うつし繪ゑの影かげ芝居しばゐは、何なにも奥山おくやま、狼おほかみの幕まく
ばかりと限かぎらぬ。で、今夜こんやは一つ新狂言しんきやうげんを取立とりたて、
お慰なぐさみに備そなへる。

矢張やりの、鳴聲なきこゑは附ついて廻まる。
……「下谷したや
竹町猫たけぢやうねこ又怪談またくわいたん、」
「ついで此この四五日にちの事ことぢやで、疾はや
い處ところを御賞覽ごじやうらん。」

と口くちをへの字形じなりの眞顔まがほに成なつて、臺だいの上うへへ掌てのひらを立た
て、すつと仕切しきり、

「場所ばしよは其その竹町たけぢやうで、……清元きよもとの師し
匠ぢやう……お雪ゆきさんと云いふ、美うつくしい姉ねえさんの内うち
でなう」

と、まじりと云出いひだす。……席亭せきていの目めは暖簾のれん

の合せ目に据つた。

「實はそれ、看板にもあつて、今月此の席に出る筈の人ぢや。主たちには、手品と私が目當であうが、大勢の客人には其の姉さんが呼物と思はつしやい。處が仔細あつて、初日當晩から未だに一度も爰許へ其の顔を出さぬ。……ぢやに因つて、右の大勢の客人が、小勢もない。まるで來ぬ。」

其の、客が來ぬに無理は無いが、お席亭は氣の毒ぢや。處が、もと／＼此の寄席へ出勤すると言ふは、當人の其のお雪さんが承知したわけでもなし、好き好んだでは素よりなし、何も知らぬ間に、傍で以てそれ極めた奴よ。」

傍も傍ぢやが、其の姉さんの旦那——と云ふが、小僧を使ふ主人ではないよ。……何んでも人間の顔をした狒々同然の獸の事を、妾の旦那と言ふと思ふだ。主たち分らずば、内へ歸つて阿母に聞くが可い。」

と首を振つて、

「可いかの、其の旦那と言ふのが、手前の持物をひけらかす料簡で、高座へ顯さうの企謀ぢやな。」

中指にべつたり、掌を裏返しに天上を指すやうな形をしても、指環の黄金は何んとも言はず自由に成る。

ぢやが、それ、人間は然う行かぬ。

で、相談を聞くか聞かぬに、いまの其のお雪さんは、厭だ、と言ふ。「と又頭を振つて、

「知らぬわいな、厭でござんす。」と、一寸假聲で、頤を細りさせる。

其れが俳優の假聲にて、獨合點の北叟笑をしたが、
俄然として眼を剥いて、

「何、厭だ。厭だ、とばかりで濟まうと思ふか。

これ、新瀧ではな、疾くの昔、汝が出勤の張紙をば
掛けたぞよ。血の道だらうが、頭痛がしようが、五
體満足で居るものを、今更しやつ面が出せぬとあつ
ては、席亭は客に濟まず、己は席亭に男が立たぬ。

否も應も我儘から、其の我儘も己への仕向け、思に
靡かぬ平時の事なら、無理に手折れば散る花と、大
目に見て許して置く。．．．．．今度は世間へ表向
だ。四の五の吐すと焦熱地獄、鍛冶屋の土間へ打縛
つて、鐵の棒の火を吐く奴を、手、足、胴、腹、容
赦は無え、ぢり／＼とお見舞申すが、さあ、女郎返
事は、ど、ど、何うだ。　　ー　　ー

と皺びた腕をぐい、と捲つて、立身上りに力む
下から、効性なく、口の周圍を横撫ですると、其の
まゝげつそりと頤を細めて、差俯向いて、

「あい。」
と假聲。情なさうな、口惜しさうな、而して斷念
めたやうに震へた返事で。・・・直ぐに甚叟齒
莖を開けて哈哈大笑つた。

「可いかの、小兒衆、野暮には勝てぬて。高い聲
では言はれぬがの。」

野分の西瓜見るやうな、小兒の天窗の影を見越し
て、木戸の方をじろりと視た。

「事と云ふとの、鍛冶屋地獄で威かすのが、お雪
さんの其の旦那、横庄と云ふ男の押物ぢや。・・・
・まさかとは思ふけれど、さて、遣りかねもせ
まいかい。主たちには分るまいが、仔細あつて、妾
とは名ばかりぢや、自由に成らぬ處から、焦れて悶
えて、苛々して、油が燃えさうな劍幕ぢやでの。」

先さ、納得して、

（あい。）と云ふ。

愈々出勤と極つたのが、此の月水無月六月の朔日
よ。

處で、日頃氣を鬱いで、お雪さんは髪も櫛巻の手
束ね。善惡ともに、寄席へ出ると事が極れば、總紙
なりにツイと寝かした、黄楊の櫛では勤まらぬ。鄰
家の姨さんを店から頼んで、髪結を呼ぶ段に成ると、
横庄の曰く、（圓鬘に結へさ。） はツはツは
ツ、

と甚四郎お爺、瘦せた肋骨の擦合うて、カチノ
と音するばかり、横腹を揺つて笑ひ、

「己が承知だ。尋常の藝人とは選が違ふ。言はゞ
道樂、其處が見識。第一圓鬘がよく似合ふ、・・・
・と晦日の鬼が禮に来る、おめでたい正月旦那、
早やでれノと成る奴よの。

さて、引續く屈託で、穢弱い手には持重る、髻は
重う成つたと云ふが、白い手絡の女ぶり。中指は澁
くても、艶も色も水際立ち、露が垂りさうな髪が出

来て、師匠の名の雪其のまゝな頸脚を、紙でぐい、と拭くのを見て、最う首の座へ直つたものと、横庄は安心しての、大胡坐のでつくり野郎。寛けた膝を眞直にフイと立つて出て行つたは、何處のか小料理屋で、ちく／＼と氣樂みの獨酌で、自から、お雪さんが出入りの、其處等の評判でも聞く氣であらうて。

跡には一人、
と甚爺は、小指を出して寂しさうに臺を指した。

「お雪さんは物思ひで、悄乎頼杖、と言ふ處が、三輪に結つて、紫の被布、脇息に凭れようと言ふ身分で無いぢや。

其處で、便りは長火鉢よ。火は多いことあつたか、何うかの。さて、恚う成ると暖いも寒いも無い。たゞつく／＼と凭れるのぢやが、フト眞向うに、横庄の敷いて坐つた座蒲團が、臀の形に幅をして、ぐたりと海鼠形に擴がつた體を見て、誰の世帯か辨別の無い、二十四五でも可憫さ、娘氣。

すつと、恚う銅壺の上に伸し懸ると、伊達巻博多
お納戸地に白で獨鈷の貝の口、柳がしなふ及腰、膝
も撓げに崩るゝ縮緬、其の水色の蹴出褌、取亂すま
で身悶えしながら、大きな蜘蛛を引出すやうに、右
のゝ、其の座蒲團へ長煙管を引掛けて、すとんと
傍へ突退けたわ。．．．此の煙管がソレ、雁首
のつけ元をの、三味線の絲で巻いた奴。

強。 いや、小道具まで口で饒舌るだ、田之助、大勉
と、莞爾。 ．．．

「本来なら、

「本来なら、姉様の繪を切抜いて、綺麗事で、映して見せる處ぢやが、早急の出しもので間に合はぬ。其處はそれ、景物の飴に免じて許しつこ。

さあ、突退つた座蒲團は、鼠が銜へたやうに箆笥の隅ツこへ暗く成る。

黄昏での、戸外を通る人顔も、彼は誰時と云ふ奴よ。

時に、其の長火鉢を置いた茶の間と、障子で仕切れて店ぢやわい。烟草に半紙なぞを小締りと置いてある。が、唯申譯ばかりでの、大した買手もない。又買手の方でも、うつかりお妾が手から釣銭でも取つて、些と手間が取れようものなら、直ぐにそれ、横庄に尻尾を振る路地裏長屋の黒犬、赤犬が、のそ／＼と附絡うて、フン／＼、

と甚叟、頤を低く鼻を鳴らし、目を細めて、

「フン、などゝ嗅ぐぢや、恐れだの。．．．
だに因つて、近所の若い人も、つい遠慮になるわ。」

處で、火鉢に凭れたが、ぞつと物思ひに沈んだか、
判然と浮いて見える、結立ての其圓鬘で、白い手絡
は薄い芙蓉。障子の紙より際立つて、しろ／＼と咲
いた顔、外から見れば風情だらう。．．．

が、當人はそれ處か、浮世が詰らないほどで、晩
の御飯も咽喉へは入らぬ。豫てそれ、ぶら／＼と半
分氣病で居る處、髪を結つて頭は打つ。．．．
うまず女の出ぬ乳を、絞るやうに、きや／＼胸は揉
まれる。所在は無し。．．．慙う成ると、鬱ぎの
蟲に押伏せられて、沸いて居る湯氣も自然と薄くな
れば、鐵瓶も手ごと灰の中へ沈みさうぢや。

餘り便なさにの、お雪さんは静としては居られな
く成つて、我と持餘す身體を、暫時枕に預けようと、
力無さうに、すつと立つたわ。心に苦があれば帯
が緩む。．．．ずるりと腰へ、這るのを、白い
手で、ト抱へながら、胸の脇を徐と壓へて、婀娜に

眉を顰めたのは、持病がある、……で、細りした浴衣の裾も、消々とした姿で、」

と言懸けて、甚爺、手拭を取つて、はらりと捌いて、すつと扱いて、恚う樂屋口の襖へ、影を斜め。振向いて、ト加減を撓めて、

「はて、此處等は、映繪ぢやと、田之助にして見せて喝采ぢやが、私の手拭では納まらぬ。」と、口をむぐ／＼さして一寸見たが、何うやら手拭の其の影が、見知越の雪江の、遠い處に映つた影法師のやうに見えて。……間の離れた席亭は、此方で暖簾の裾を分けた。

高座前の小兒たちは、目と口が唯動く。

「で、店口の障子を閉てようとした處と思はつしやい。……立棧に手を掛けて、戸外を見ると誰も通らぬ。晝と夜がむら／＼と入混つて、溝石の怪訝な奴が、ひく／＼動かうと言ふ景氣なものよ。うゝ、と唸つて、工場の汽笛やら、川蒸氣の遠吠やら、暮六つの鐘やら、氣が遠く空を傳はる。

妙めうにの、人間にんげん恚いかう言いふ時ときは、一人世ひとりよの中なかから掛離かけはなれて、山奥やまおくへ引込ひっこんでゝも居ゐる氣きがして、近ちかい向家むかひやに點つついた灯あかりも、谷底たにそこを見みる孤屋ひとりやの燈火ともしびぢや。

あゝ、戀こひしい。誰たれかゞこんな時ときに、旅たびの姿すがたでふらりと來きて、顔かほを見みせてくれたなら、どんなに嬉うれしからうと思おもふ。お雪ゆきさんのはの、然さうして横庄よこじやうを嫌きらふほどにの、一人他ひとりほかに、命いのちまでもと、思おもひ思おもはれる男をとこがあるぢやて。――はて、主ぬしたちには分わかるまい、――内うちへ歸かへつて内證ないしやうで聞きけさ。……

ぢやが、話はなしのやうな身みの上うへ。……山やまの手てへ飛とぶ時鳥ほしきずが、宵よひに下谷したやで鳴ないた處ところで、魂たましひを、託たくけて遣やるわけにも行いかず、……手紙てがみのたよりも出で來きぬものを、……何なにが何どう間違まちがうても、その人ひとの來くる的あてはない、やがて來くるのは、

(へい、姉ねえはん。)

で、横庄よこじやうの指揮さしづの俣くもが、此この寄席よせへ連出つれだす段取だんどり。

トほろりとしての、拗ねたやうに、ぴたりと閉めたわ。戸棚から、仄白い後姿で、枕を出して、夜毎の涙にしつとりと、鬢を傳うて濡れるのを、つい仕替へるのも億劫さ。一枚匆ねて、一度坐つて、膝に乗せて、恍惚見て、トンと置いたのを抱くやうに、なよくと横に成る．．．．．

と、こゝで甚叟、臺の上へ握拳、其れに掛けて手拭を、細りと浮かして掛ける、と妙に顔のやうに手が白い。又其上へ、片手の掌、仰向けに載せたのが、がつくりと鬢に映る。．．．．

「横に。・・・其處で、蹴出棲をすらりと搦
 んで、膝を内端に寝て居ながら、恚う、フト目に付
 いたものがある。前刻方、横庄の身内同然の三下奴
 が来て、掃除をして、跡が世話の無いやうに、長火
 鉢の上あたりへ掛けて行つた釣洋燈ぢや。」

磨硝子も、こんもりした大きな笠での、白く朦朧
 と、尤もまだ燈が点けず。・・・何も變つた事
 では無いが、其のさ、油壺が眞鍮ぢやて。些
 と・・・此れに曰がある。・・・

お雪さんが、退引ならぬ仔細あつて、都合上、横
 庄に竹町の妾宅へ取籠められた、其の以前、家が柳
 原向うの神田白銀町邊にあつた頃よ。昨今でもな

ー あの人には二番目の妹で、出戻りで小兒のあ
 る其の姉さん、弟やら、妹やら、父親はなくなつた
 ぢや、病人の母親をはじめ、大勢が、九分まではお
 雪さんの仕送りで暮して居る、矢張此が横庄の手當
 さの。其れも近頃は不勝手で、あの見得坊が妾宅へ

電燈も引かない中から、お雪さんには胴巻を絞つて、
財布を拂く。焦れて悶くのも其の筈かい。はて、其
れは何うでもぢや ー ー 其の白銀町に居た頃よ。

大風の吹いた晩。今のな、
ずば歸つて聞けさ。右の其の思ひ合うた
中の若い男が逢ひに來た。何も大風の晩に來たから
と云うて、主たち屋根屋の手間取とは思ふまいぞ。
お雪坊が泣かうでの、はッはッ、
と陽氣に笑ふと、何が可笑いやら小兒たちも嬉々
と行る。

暖簾を分けた席亭の顔は、且つ以て珍なもの。

「其の夜、逢曳をした歸りがけに、男が言ふぢ
や。小兒はあり、風が吹いても氣に懸るに、住居は狭
し、小兒はあり、旁々以て、火の下で其の封筒の内
職をする、あの燻ぼつた硝子壺の洋燈は危い。
其れを氣にして居る所爲か、二日續けて、洋
燈で過失のあつた、一ツなんざ二人死んだと言ふ新

聞を見たよ。何んの世話も出来ない私が、世帯道具を構つては、内の人たちの思はくも恥かしいが、後生だ、頼むから持つてお歸り。

で、些と廻道がした柳原の裏通りで、成りたけ晁つかないのを選つた洋燈屋で。……婦が先へ入つてな、

(洋燈を見せて、)

と眩しさうに云ふと、背後から、

(金のだ、金のだ。)と男が入つた。

いや、何うも黄金の茶釜でも買ひさうな勢さの。

恚る客人、粗略あつては商賣冥利と、洋燈屋の主人が、べら／＼と帳場で指揮だ。

(へい、へい。)

で、若いものと小僧とで丁寧に見せたほどにの、出したほどにの、あれか、これか、と云ふた處で、世話場で使ふ燈ぢやで、望み通りが二兩不足よ。

すつかり揃へた蓋を嵌めて、
（出来ましたな。）と若いものが釣つて見せる。

男は少し酔つて居た。入りがけに勢よく、金だ、と威張つたあとを、少々鬱いで、戸外を背後に、土間の椅子に腰を掛けて、俯向いて、此、彼、と婦が言ふたび、黙つて頷いてばかり居たつけ。

（棹が些と曲つて居るわいな。）
と其の釣つたのを視めて、……
と甚叟此處を一寸假聲で。

「……視めて、其のお雪さんの、
（よいのと取替へて下さんせ。）
（まあ、澤山ぢやあないか。）
と男が云ふたぢや。

（せつかくお前の御しんせつ、私や心が澄まぬわ
いな。）

男はついと立つて顔を背ける。婦もはつと氣が着いて、颯と脛を染めたと思へさ。そらさぬ亭主が、

(それ、早く、取替へて、・・・心を入れた
か、油をまけて上げ申しな。)

處で、大剪で、しゃん、と切つて、若い衆が、絲
屑を、ふツと吹いて、

(たゞ最う、お使ひなさりや可うございます。)

と古新聞でそれぐに包んだあとを、くるりと車の
絲を引く。」

「其れをの、」

と飴甚仕方をして、

「半分持たうよ、と男が言へども、殿方が見つと

もない、とて、お雪さんが、ト袖に抱へて袂に提げ

てよ。先づ一張羅でも身躰みぢや、縮緬羽織の扮装

で、世帯崩して持つて歸つた。風の凪いだ空が、ま

だ胸騒ぎでもするやうに、お月様が昇する……

白銀町を、連立つて歸る。二人が氣では、輝き渡る

寶の山から、大きな水晶を抱いて來たほどに、いそ

／＼した。――

と云ふ。……それ白磨きの、お雪さんには

玉の燈籠でやす一物が、宙に、ぼうつと、恁う枕を

した上に見えたぢやて。

わが背子が來べき宵なりさゝ蟹の……

と飴甚、聲にまで、思入れで、用ありさうに掠めた

が、何うやら様子が、歌のあとは知らぬらしい。

「すべて女中方がの、結立ての圓髻で轉寐を、此の暮相にしてござると、思ふ男が逢ひに来る、・・・即ち待人来るぢやが、其のかはり、人が来ない時に無事では済まぬ。必ず魔が魅すものとしてある。

以前、白銀町の時分には、恠うした處へ男が見えた。其れがの、何も魔性のもので、フツと見ると脚絆草鞋で、菅笠を持つて、すつと障子の間から間の内を素通りに、裏口へ抜けて消えたのも何んでもない。

正銘の、其の人さの。

夢かと起返つて、恍惚すると、

(何處か、お出掛けか。) と尋ねる。

(あら、何故ですか。)

と一寸髻に手を觸つて、うつかり衣紋の媚めかし
いの。

(髪を結つたもの。) と立つて居て言ふ。

(たまには、貴下に見せたいわ。)

と、．．．．．莞爾した時の事なんぞ、思出して、
今の、お雪さんの、伴の洋燈を見るにつけ、．．
．．．．．あゝ、其の時はさて、來ると言ふ約束の、時
が少し後れたのでさへ、五年目の日の暮がたに、め
ぐり逢つたやうな氣がした。

今日の髪は何にする。．．．．．其の人に別れて
から、死んだつもりで居る身體が、墓の中から迷つ
て出て、高座の満座に照らされる。横庄に結ふ鬘
は、坊主になるより恥かしい。もしや其の人が聞き
でもしたら。と氣絶けるやうに、齒を切つて、ぶる
／＼と震へたと思へ。

搔筆りたい鬘の毛は結立てのを見て行つた、横庄
の疑り深い目に、うつかり獨寝の枕にも鬘のほつれ
は見せられぬ。．．．．．で、大事に据ゑれば尚ほ重
い。洋燈は、ぐん／＼天上へ、頭は何んと。．．
．．中差の両端を、ものが、壓へて押伏せるやうに、
がツくり沈む。．．．．．瓜實顔は細りと、鬘を見
せて白かつた。

ト其の、カタノと音がするわい。

うあ、うあ、あゝ、あゝ、と逢魔ヶ時の、辻の
物賣は、一里塚の呼子鳥ぢや。豆腐屋やら何やら知
れず、穴の中へ消えて行く。・・・すると、又
天井から下りたやうに、洋燈の白い笠が目前へ下り
た。

其れへ、ちらりと人影が薄く映す。ト見るとの、
違ふ。どん底へ落ちた日が、あくる朝へ持越しの薄
明りに、鉢前の南天の葉へ映つたのぢや。

最上一室ある。・・・お雪さんの横に成つた
のは、茶の間の九疊。
と飴甚、臺の上を手で仕切つて、

「店と・・・奥に八疊ぢや。ト此の奥との間
が、狭い廊下に成つて居ての、突當りに、下の後架。

さて、恚うした三間ばかりの家にしては珍らしい。
奥の八疊に附いた縁側の向うへ、十坪ばかりの、じ
とノと濕つた庭が突出て、上の後架が別にあるぢ

やよ。

ト此この八疊でふがだゞつ廣ひろい。竹町たけちやうあたりの町屋まちや並なみに
は珍めづらしい、お屋敷やしき方の書院しよゑんづくり、鴨居かもゐに犇ひしく々と
鑄物いものの釘隠くぎかくしを打うつたわ、柱はしらも黒塗くろぬりに塗ぬつたらしい。
尤もつとも大古おほふるなものぢやに因よつて、悪わるくすると、ぶら下さが
つた煤すすに見みえるが、襖ふすまの引手ひきてに、念入ねんいりぢや、怪あやしげ
な總ふさがぶらりよ。」

「此れに準じて、床の間も大いわ。其の床の間に、緋の天鵝絨の脇息一つ、据ゑてありは凄からう。

横庄が恐しく、此の座敷を好んでの。それ、ト正面に構へて、脇息に凭れながら、お雪さんに三味線を持たせると、其處だ！ なぞと奇な聲を發しながら、三下が酌をしようと云ふ……御家風。

いや、さて聞いても恐れる。……」

と甚叟厭な顔して、

「續いて縁側も大分廣い。が、疊なぞはじた／＼と中が窪んで、敷合はせの持上とつた中には、鼠の子でも、うぢや／＼と蠢きさうぢやて、異體さの。

お雪さんが又こゝを嫌つて、衣服を着替へればと云うて、邪慳な姑を持つたやうに、茶の間の隅で、坐りながら、きゆつ／＼と黒襦子を廻すまでも、端近を厭はぬのは、奥の八疊が可厭さにぢや。

で、殿様脇息にお凭りの節、手足を釣らぬばかりにして、御前體へしよ引き出さるゝ他は、減多に自分では使はない。手廻りのもの一切茶の間ゆゑに、たゞさへ間廣な八疊が、寂と蒼黒う片附いて、あのさ、ごみ／＼した町屋の中ぢや。通りすがりに透かしてゞも御覽あれ、丁どあかずの間の千疊敷、昔、佐竹のお部屋様でも迷うて居さうよ。

其の筈かい。お天氣ものゝ縁日草などは、植ゑた處で、根から、じよび／＼と浮いてしまふ。ひとりでに生えるものは、三才圖繪でも評判な、濕地に生ずとある、秋海棠。で、青苔一面、幻のやうな蟲が湧いての。．．．入梅時分は、によい／＼と名も知れぬ、鉢坊主が雨夜の行列、とある葦。奥州の山家だと、此の比丘に崇られて取殺されようと云ふ奴よ。正面が石垣ぢや。

が、さて、何十年経たものか．．．蛇の莫産、燈心草、．．．濕氣るのは其れでも知れる。いつか中、墓原が定旅籠の疊珠沙華が、迷ひ咲きにめら／＼と燃えたと思へさ、其の石垣に．．．

廻りの八百屋の親仁様が、可い年を仕つて、何を狼
狽へたものだか知らぬ。總井戸裏の石垣に、優曇華
が咲いた、と觸散らいて、近所合壁人人群集

あの分では、いまに蜩が湧きさうな。

と云ふ石垣で、裏に坂があるでも何でも無いが、
其の上がの、根が濕けるに因つてぢやらう、一段土
臺を高く築いた、然る其の廣大な武家邸の跡よ。前
から最う、壊れた門も見えなくなつたが、事に因
と、其のさ、邸の一間を、ずる／＼と引下ろいて、
先代の家主殿が、家賃の策略に附着けたものであら
うと云ふ。

石垣上の其の邸あとには、長屋もあるがの、誰も
住まいで、二三軒、屋根も草茫茫々として空屋で居
る。．．．と云ふものは、垣越ながら一足出る
と、彼の黒書院が目の下ぢや。其處へ横庄が脇息ぢ
やらう。お刺にお雪さんを惱めつける殿様の隠家ぢ
や。處を、上から見透かす、と言ふ廉で、窓を開け
るな、張物を庭へ出すな、はまだしもよ。．．．

上から抛つた西瓜の種が床柱へ喰込んで、お妾が氣絶をしたわ、と途方も無い難題での、三下どもが、尻やら頭やら突込むぢや。借手は這々遁げて行く。御差配も文句を言ふは知つたれども、對手が對手で泣寝入。

處で、垣越に高い處から、見下ろす人間は居らぬが、岨の草原容赦はせぬ。．．．右の書院の突出した廂と、擦れ／＼な垣の上を、のさ／＼と犬が通る、．．．鼯が駆ける、蛇が這出す、蚯蚓が下る。

ト此の縁の附いた鉢前ぢや。それ、洋燈の笠に人影がさしたやうに。南天の葉がざわついたのは。

聞かつしやい。ー

上の後架が又一ヶ所さの。．．．同じく邸方のものらしい。此れが又格別に廣くて、大い。其處に．．．ト人の立つたやうな氣勢がしたとの。影は南天と分つたが、別に又ぢや。

黄昏さの。

これだけで、あツとも言ふべきぢやがさ、其處は
豫^{かね}て横庄^{よこしやぶ}が、嫉妬^{しつとぶ}深い用心^{ようじん}で、三下^{した}なぞが、裏口^{うらくち}か
ら、恚^かうした處^{ところ}を、拔足^{ぬきあし}で窺^{うかが}ふ事^{こと}が毎度^{まいど}ある。」

「剩へ！」

など、甚叟は意氣込んで開き直つたが、いや、高座前は悲惨なもの。景物の飴が目的の幼いのは、さすがに寄席と心得て手も出せず、芝居の影も、根っから義経にも辨慶にも映らぬ處から、鼠の驅廻る天井下、疊のへりをちよろ／＼と傳うて、一人二人と裏木戸さして縁側を引込む、と残つたのは孤兒院の齒磨賣で。其さへ、其の一人の年下の方は、茶番所へ引退つて、奴と二人で睨めつ競で、きよと／＼するのも道理こそ、今出た小兒が、一齊に新手と成つて馳加はつたやうに、甲高な聲がきり／＼と交つて、横手の紺屋の裏あたり、わつしよい／＼わつしよいと冴返る。

ト又引汐に、遠くの方へ行つたらしい、わつしよい／＼と波に漂ふが如くに、くる／＼と廻り退きに退いて行く……

此の氣勢が、電氣を一ツ引搦んで、駆出したやう

に一際陰氣。

其の替り、何の縁に引かれたやら、……間さへあれば奥へ入つて、件の襷がけのまゝで、古い繪入雑誌を讀んで居る、お園と云ふ娘が出て来て、正面のボン／＼時計の掛つた柱に凭れて、熟と聞くと、白面の女中は、件の積上げた蒲團を楯に、目をぱち／＼、驚破と言へば、突伏さうと油断なく身構へる。……席亭は、と見ると、何時の間にか、半身暖簾に摺込んで居た。

「……何んと、それ近頃では、石垣の上の其の空長屋を可い事にして、地獄の石灰屋でございと云ふ、耳まで黒い、向うの鍛冶屋の弟子職人が、好い潜場所にして、晝情急の、宵寝を遣らかす……と此の徒が、その、搦手の見張番。要害よき處を占めた、横庄の隠目附ぢや。

何んとか叱言でも言ふ筈の、また鍛冶屋の女房も、火の職柄で、間狭な住居、糠味噌が湧いてならぬで、人手はあるし、町を越して向うの小山へ、漬物桶を

入れて置く。と云ふ始末で。

人氣はある……我性に遣れば、大跨ぎで、
上り下りも出来る石垣ぢや。内證で裏から透見でも
するか、と思ふと……今にはじめぬ事ではあ
るが、お雪さんが口惜くつての、

（誰？ 誰だい。）
と重い枕を、斜に擡げると、沙汰がない。

（誰方です。）
何んにも居らぬ。

はて、其れは氣の所爲と極つたが、丁ど、こよう
を達さうと思つて、……其處で起きた。

が、枕を片手に、諸膝をくの字に極めて、屹と見
込んで、別事なし、……とさて立つて、手近
な、其の障子一重の下の後架と、思つたが、明取が
絲のやうに、壁の隅ゆゑ最う眞暗。……向う
の縁は薄明。其の方へ、とふらりと立つと、キヤリ

とする、胸を例の壓へながら、浴衣の褌を引合ばせながら、敷居を一段、がつくりするまで、廊下へ褌を引いて、向うの廣間ぢや。

件の八疊をすつと通つたと言ふがの、
黒書院の薄暗い中に、浴衣が薄くよ・
艶の照々とした形と成る、と人が戸外から覗いたら
早腰を抜かし兼ねぬ。御當人も凄いいよの。

で、縁側へ出た。

つか／＼と戸にかゝつて、はつと南天の黒い影に、
裳を包んで立留まつたと言ふものは、
かつしやい。

日の暮方に、半分手探り模様で厠へ入る、と昔か
らも言ふ事ぢや。誰かの爪に搔かれるとて、身體の
何處かへ、不思議にの、すつと絲のやうな血が走
る。・
観面に疑ふべからず。

二の腕なり膨脝なり、露な處こそ然もあれぢやが、
二枚襲ねた衣服を透して、女中衆は乳の下なんぞ遣

られるとよ。

さて、何^どうか、襲^{かさ}ねた衣服^{きせいの}の覺^{おぼえ}としては當^{たう}分^{ぶん}ないが、
飴^{あめ}屋^やの甚^{じん}四^し、近^{ちか}い頃^{ころ}、股^も引^ひを透^{とほ}された、
繼^{つぎ}はぎにもしろぢや。押^{おし}事^{ごと}と云^いふは決^{けつ}してならぬも

ので。」「……………」

「さあ、其れに就いてぢや。」
と、飴甚は著しく眉を顰めて、

「お雪さんの身に取つて、豫て一ツの不思議がある。．．．．．髪も結はねば艶が出ず、紅もさゝねば光らぬが、自分の身體を何うも出来ぬ。時には何とも持餘す——と言ふのは．．．．．」

餘り思つて情が迫つて、其の情人のことで、胸を引裂かれるやうな氣がすると、あの其の、透通る、玉のやうな乳の上へ、すつと薄皮を切つて一寸ばかり、颯と絲のやうに血が走つて、心のいれ墨が眞紅に咲く。．．．．．又よく、それを横庄が知つて居ての、初中氣にして嫉み猜んで、見付けると、酷くして、其れだけの疵は別に、生身にお見舞申さずには濟まさぬのよ。秘して居るが、他所からずつと歸つた時など、有無を云はさず、突如衣を脱がせて検べる。．．．．．譯ぢやらう。

知らずにこそ事は濟め、．．．．．疵を検べる仕

打なんぞ、風の便りにも聞いたがよい、其の男は後
顛巻で飛込んで、お雪さんを自由な身體にして遣
か、出来ざ、横庄と刺違へて死なずばなるめえ、う
む、でなきや嘘だ。」

と目を睡つて、ぶる／＼と、干鯛とある頭を掉つ
たが、一息吐いて、

「先づ・・・其れは兎も角もぢや、フト入ら
うとした時に、後架のものに引搔かれる、と血の筋
が走る事を思出す、とお雪さんは悚然として恐しく
なつた。

・・・ばかりで無い、件の身内を検べる奴。
で、もし其の血の痕でも附くとすると、一責め責め
られねば納るまい。覺悟の事なら斷念める。・・・
・後架のあやかし、其れがためにと、尤も我にも
あらず、竊と膨りした我が胸を、凄いものゝやうに、
恐怖々々覗くとの、其の白い色が中形の藍を透して、
植込の次第に暗くなる影に、藤の花が咲いたと見え
たが、幸ひ葉の裏に、紅い守宮は潜んで居らぬ。

吻ほつと息いきして、こようは後あとにしよう……考かんがへ
れば不ぶ氣味きみな、其その八や疊たかを、暮くれ方がた來くるのでは無なかつ
たものと、……燈あかりを點つけて……ぢやが、
其その釣つり洋燈ラムプでは、何どの後架はかりの中なかも見みない、と云いふ、
矢張やつぱり情人いひひとへの心中しんぢゆう立たてど。

どれ、手洋燈てラムプを別べつに點つけて、今度こんどは下しもの後架はかりへと、
其處そこで……戸とに手てを懸かけたものぢやでの。さ
つと灌そくいで干杓ひしやくをカタリ。ト南天なんてんの下葉したばの、はら／
と霽しゆくするのを涼すずしさうに見みながら、つい、眞圓まんまるい
書院しよゐんの圓窓まるまどの前まへに、縁えんに置おいた手拭掛てぬぐひかけへ、一寸ちよいと屈かん
で、恁かう手てを拭ふいた時ときよ。……薄明うすあかりに仇白あだじろい、
足許あしもとについ氣きが着つかなんだ、で、其その屈かむのに力ちからが
入はいると、

(痛い。)

と言いつたものがある。

其その時とき、丸窓まるまど一杯ばいに、むら／＼と影かげがさしたわ。
唐突だしぬけで、何なにを思おもふ暇ひまもなし、

(御免なさい、)

とついそれ、お雪さんは其の拍子に、矢張例の隠密が忍込んで、さて御念の入った、手拭の下に腹這ひして窺つて居たものと思うたさうぢやよ。

手應があつたわ、踏んだわ、の、

(痛い。)...と云ふから (御免なさい。)

詫びながら、恚う足許を見ると何も居らぬ。...
...居らぬが、雖然、赤斑の猫が一匹、淺葱の暖簾と云ふ形で、手拭の中から半分...」

と、偶然言ひかけると、其の木戸口の暖簾に居る、席亭の頭が變に、恚う、...上下にもじ／＼する。

「ト耳を出して、圓く成つて、香箱を造つて居たで。

(まあ、)
と襖を膝で挟んで其れへ。...

（お前かい。）とお雪さんが、氣のそんな鬱いだ中でも、豫て嫌なものでは無いから、莞爾笑うたと言ふ。

すると、其の、痛いと言うたは何ものぢやい。「
と飴甚、臺を壓しなから、高座で一膝乗出して、

「此やの、心が顛倒したと言ふものか。それとも、
赫と逆上せた餘りに、茫と成つて、前後不覺とでも
あつたかの。」と自分で言つて、打傾いて、目を
じろり、人に訊くが如くに甚叟は其處等を視めた。

十七

見ながら飴甚、何か樂屋口を覗いたが、敢て後連
 を心付けた様子はなく、何うやら其處に、大きな、
 夜の空洞があるのに、うしろ髪を引かれた風情で、
 其のまゝ振返つた、目が、きよろりとして居る。

陰氣な聲して、

「例の岨の上は空屋なり、境界の四ツ目垣の前の
 草の生は、前云ふ通りぢや、犬も鼬も殿様さの。蝦
 蟆さんか、槍を振つて、其處退けるで通らうと云ふ、
 車前草街道の松並木よ。．．．．黒や、駒や、と
 名を呼んで、手から餌を飼ふ顔馴染は無けれども、
 白も赤も、いづれ見知越の近所の野良猫。」

で、お雪さんが、あゝ、猫の足を踏んだのか。

（痛かつたかい。）
 と優しく、中腰で熟と見て言つたと思へさ。

赤斑が、取つても付けない風をして、故とらしく、
 瞼を深く、薄眠りをして澄まして居る。

(御免なさいよ。)

と其の顎の下を撫でさうに、お雪さんが手を伸ばして、

(よ、堪忍。)

と云ふ。ト上瞼をピクリとやって、巳の刻の目を黄色く、黒い瞳を衝と反らすと、むくりと、其の顎の斑に敵りを入れて、立つが疾いか、

(こヤー) と啼いたが、ウンニヤ! . . .

と聞えて、其の差出した左の手で、ひらり、と招くやうな手つきを遣る。爪が銀色に、ト動いたわ。其のまゝ横飛びに、胴を伸いて、ひよいと脊脱の石へ飛んで、のさ／＼のさと庭へ下りた。唯、ものゝ六尺と遠くは退かずに、南天の下へ行つて、前脚を折つたらうではないか。

で、ぎろりと眼を光らしたが、すぐに薄眠りをする。其の毛が、ふは／＼と葉蔭に浮く。

(あゝ、聞分けのない。)

畜生よ、と浅間しく思った。今度のニヤーは猫の

聲、別條なし。ワンと啼いたわけではないので、これ、笑ひ事ではないぞ。」
と、甚叟薄笑ひをしなから饒舌つた。が、誰も笑ふものは無かつた。

「其れを

(いや。) と言つたやうに聞いたのは、自分の氣の所爲とは、お雪さんにも分つたで。詫びるものを、と憎らしくも成つた處。

妙に熱いやうな氣がしたので、何心なく、恚う、其の爪をかけられた處を見ると、・・・・さあ、くつきりと、痕がついた。

吉野紙で包んだ眞綿に、紅絲が浸んだやうにの、あの腕の二を斜に切つて。

猫が目を剥くまで腹立つて、爪を立てたにしては、餘りに弱い。實は巫山戯て觸つたくらゐ、ほんの掠つた疵だに因つて、さして痛うもないが、それ忘れは成らぬ！ 横庄の呵責ぢやて。

此奴が嬌弱い婦には、殆ど生死の目と言ふのよ。
苦患の手形が出来た。

とお雪さんは、引据ゑられたやうに、がつくり坐つた、縁の端で、

（あゝ心ない、獸だとして情を知らぬ。つい氣もつかずにした粗相、眞から詫びて居るものを、いやなら何うともしたが可い。何が憎うて、人手に掛ける遠廻しな祟をおしだ。其の人も、人に因る、横庄が目廉を立てゝ、どんな思をさせうも知れぬ。・・・それと寸分違はぬ此の疵、背だと胸だとして、乳だとして腕だとして、ある處に容赦はせぬ。

そんなに、お前憎いなら、一層の思ひに、咽喉を噛んで殺しておくれ。最う、私や、それで無くつても。）

と日頃の事を思出して、一時に、ぶる／＼と身内を震はしたと思はつしやい。

猫がの、・・・何よ、あの蛾の巢でもありさうな、耳の裏を、ビク／＼と動かいたわ。

前脚まへあしを揃そろへて、ト背伸せのびをして居直ゐなほると、長い尾ながを曳ひきながら、悠々いゆう／＼と二ツばかり飛石とびいしの上うへを傳つたうて來きて、のたりと沓脱くつぬぎへ上あがつたて。

廁かはやの屋根やねは眞晴まつくらで。」

と甚叟じんそうは暗くらい額ひだじで、天井てんじやうを打仰うちあふぐ。

其處で、目を瞑つて、少時考へるやうにした。

「沓脱へ上るとの、脚を支いて、尾を捲いたが、石の色も薄赤く見えるやうに、斑の影が映つたと言ふわ。魔性備はつたものかの。別に伸上る様子もないに、其の舌が、縁側に、ト恚う膝をついて、其方へ返へして疵を見せて怨んでござつた、お雪さんの腕へゆつくりと届いたげな。

で、クシノゝと息を吹いて、歪んだやうな、あの口を開けると、銀を磨いだ牙を齒吐いて、朱を流いた顎を大きく、眞赤な舌で疵をべろゝと嘗める。

嘗めると・・・ざらゝと其の、冷い刷毛の當る氣持で、紅を封じた蒼が開いて、眞白な花に成るやうに、すらゝと曇が消える。唯見ると、赤猫の顔に光が出て、其れに髭も腕に觸つて、金色した優曇華が颯と生えた風情は可いが、・・・目の色が眞青に輝き出して、耳で兩つに別れた毛が、赤いか、黒いか、颯と捌けて、長い振亂したに寸分違

はぬ、……何うやら猫の形の人に見えた。

其の顔が、手に付いて、嘗めて居るやうでもあるし、乗出して、厠の窓から熟と覗いて居るやうでもある。

然うかと思ふと、石垣の上の四ツ目垣へ、首だけ出して、其處にも大きな猫の顔。

迷惑な腕の疵が、見る／＼消えるのが嬉しうて、恍惚して、茫と成つてござつたのが、今の気が着くと、はツと思つた。途端にの、人間の聲を出した。

(痛い。)と云うた事も思當つて。……
怨を聞いて合點して、それ、舌で拭いて居る、と肩から氷を浴びたと思へ。

猫殿は、一應仕事を濟まいて、口を離れたわ、と一ツ横撫をなされた處で、

(最一つ嘗めますか。)
と言ひさうに、至極心得た圓い顔を、耳を立つて、

眞向に、分厚に擡げた奴を一目見ると・・・

(うん、) と引呼吸になつてお雪さんが、上から黒髪を、ト引立てられたやうに、衝と立つと、浴衣の色を蒼く倒れて、其のまゝ死ぬ事と思つたらうでの、胸へしつかりと白い手を合掌に組んだなりで、氣絶して了つたものよ。

縁側の端へ出て、眞暗な中に其の姿ぢや。・・・
・時刻も丁ど、寄席へと云ふので、指揮の俵が戸口へ来て、

(へい、御新姐さん。)
か何かで、格子で呼んでも返事がなし、店を覗いても家中暗い。・・・で、まご／＼出たり入つたりの處へ、一足後れて、微酔で、引返して來た横庄。

酔つては居るしの。鐵瓶の置場所が違つても、何んの彼のとあなぐつて、目に廉を立てる奴。命から二番目の魂と云ふ妾が、居處も居處。暗さも暗いわ。

赫くわつと成なつて、暗やみにも白しろい、咽のど喉なりなり、手てなりへ、突とつ
如じよく食くひつきもし兼かねぬのが、．．．．實際じつさい、病びやう氣き
と合が點てんして醫い者しゃ騒さわぎに成なつたと云いふのは、．．．．

毒どくも用もちゐやうによりけり。

例れいの隱かく目しめ附つけの一人ひとりが、夜やしよく食こ後の骨ほね休やすめ、裏うらの空あき長なが
屋やに寝ねそべる次ついで手に、四め目が垣きから覗のぞいて居ゐたわい。
で、此こいつ奴が、譯わけは知しらぬが、赤あか斑ぶちの猫ねこが、何なにかお雪ゆき
さんさんの腕うでの處ところを嘗なめて居ゐたのを確たしかに見みた。．．．．
處ところを急きんにフイと立たつた姿すがたが、暗くらい中なかへ消きえたのを、
氣き絶ぜつで倒たふれた事こととは知しらず、其そまゝ茶ちやの間まへ入はいつた
ものと思おもふ内うち、横よこ庄しやうの怒ど鳴なる聲こゑに、石いし垣がきを摺すつて下お
りて、一しよ緒じゆにソレ、水みづよ、氣きつけよ、と騒さわいだ儀ぎぢ
や。

尤もつもの、幻まがについたやうな此この腕うでの血ちの痕あとは、現うつ
とも夢ゆめとも消きえたり、の、横よこ庄しやうからは何なんの難なん題だいも
受うけずに濟すんだが、さて、猫ねこ又またの方は、其それ切きりで
落らく着ちやくせぬ。

今いまの話はなしは、此この席せきの初しよ日にちの宵よひぢや。．．．．さ

あ、氣が付いても唇の色まで變つたものを、出勤處の段でない。

が、しかし、一時の事で、可恐しい夢に魘されたも同然。翌日は、もう、あの弱い人なれば、丈夫と
は行かぬまでも、先づそれ、平日の身體に復つた。」

十九

「さしたる容體では無いに因つて、横庄が承知せぬ。直ぐに二日目から出勤と云ふ事よ。．．．お雪さんも厭々にせい、一旦頭を縦に振つたものぢや。自分でも其の氣で湯へも入つたが。」

薄化粧の湯上り、髪も又昨夜の騒ぎぢや。結直しで、きちんとして、茶の間で一服。晩方の、例の洋燈を、点けようか、些と經つてにしようかと言ふ、同じ刻限に成つたぢやの。

あゝ、今時分と思ふにつけて、妙に暮方の潮がさす、悚氣と頸許から寒氣がし出した。．．．頬に、窶れた影の映るのが、横庄の目にも見えたと言ふがの。

猫が鳴く。．．．あの、その、う、う、あゝ、あゝと、お日様と一緒に世の果へ沈んで行くやうな、寂しい物賣のやうな聲で、ニヤーゴロロ、ニヤーヲウソソ！」

と、眞似たが、厭な音で、飴甚は咽喉を揺る。

「ト鳴くと、お雪さんがそはつき出した。額に支いた長煙管の尖が、膝の彼方此方、右左に振れて、胸も上下に落着かぬ。

其の鳴くのが、一寸、間を措いて、又はじまると、

（姉や、姉や。）

と聞える。

（あれ、私の名を。）とお雪さんは、煙管を、ばツたり、で、肩を抱いて一窺みに成つた。

（雪や、雪や。）

と鳴くと云ふのよ。

（馬鹿を吐かせ！ 盜賊猫だ。手前が何か、盜賊猫を可恐がる風かい。呼出しを待つてる癖に。）

と横庄がの、執念深い目を晃りとさせて、じろりと見ながら、

（畜生。）と怒鳴つて、奴が鳴いて居ると思

ふ、．．．．．其の廊下の突當り、下の廁の傍に成る、板戸を向うへ突開けてある明取り、細う、管の中見る體に、八疊の羽目と、廁の板圍の間から向うの石垣が覗かれる．．．．．其處へどか／＼と出て、ぬつと、横庄が面を出したが、何も居らぬ。むら／＼と毛のやうに動いたのは、龍の髯と稱ばかりが嚴しい、もしや／＼と生えた草での、年中日の當らぬ廂合ひぢやに因つて、芬と、かび臭い。

(盜賊猫の癖にしゃがつて、遁足の疾い畜生だ。)
と横庄、忌々しさうに呸いて、
(お雪、もう居ねえ、大丈夫だ。) と言つた聲の終らぬ中ぢや、ドウンと屋根の上へ、夥しい、ものゝ石臼を落した音ぢや。

(あつ。) と、お雪さんは眞俯伏よ。

横庄も異な氣がした。

(燈を點さう、暗い。) と叱るやうに、些とけたゝましよう云つての、燐寸を搔探すで。

(私が、今。)

と、其の中でも、厭なものに手は掛けさしたうな
かつたか、お雪さんが自分での、それ、洋燈を点け
るぢやが、中腰の、膝も緊著けるやうに震へながら、
伸上つたと思へさ。洋燈も笠もかち／＼する。漸と
点けた灯が未だ蒼い。火屋をト冠せて、下から心を
上げようとしたり拍子に、磨出しの笠の裏に、ぎざ／
＼のあつた奴、焦つてふら／＼と成る指の腹が引掛
つて、薄で裂いたやうに、すつと切れると、垂々と
血が染む。

お雪さんは蒼く成つた。

横庄も顔色を變へたつけな。

天井裏へ息が懸るかと思ふと、近々と、釣洋燈の
眞上の處、ぱつと、大屋根一面に擴がつて、風袋を
開げた聲で、

（消してやろう、□□□、ゴロニヤア！）

と猫殿が、

と飴甚、腰を宙に浮上つて、目を据ゑて、一生懸
命の齒噛をしたれば！ 堪るものか。

(きやあ、)

と叫んで、織細い脚で、高座前から、席の真中へ
匆返つたのが、まやかしの孤兒院で。いぢけたゞけ
に、あとはびしよ／＼と濡鼠の體で、茶番處へ引込
むと、それより前、ひそ／＼と一ツ處へかたまつた
娘ぐるみ、稻荷堂の後へこぼれた、月夜の松球と云
ふふ風情で居寤む。

「何んです。旦那、ほい、」

と生欠伸を嚙殺して、下足番の三次が、暖簾を分
けて、席亭の四角く禿げた、つむじの上から高座を
見込む。

「狼が猫に化けたわ、何です……今のあの
 變な聲は、途方もねえ。や、眞赤な面をして、飴甚
 め、酔つてやがら……」

で、三次は、チヨと舌を鳴らす。席亭はものをも
 言はずに、唯まじ／＼と聞く。

高座正面の甚叟、其處へ出た三次の顔を遙かに見
 ると、唐突な高笑。

「はツはツはツ、さて小兒衆や、」と句を續い

だが

其處等には一人も居らぬ。

わつしよい、わつしよい、わつしよい、と冴えて
 虚空に舞上る……夢の雲雀のやうな遠くの聲
 を、ト目當ての如く、頭でゆる／＼輪を描いて、

「すると、その、横庄は、アツと立つて、突然洋燈の心をぱつと出した、

・・・・・と言ふに困つて、猫殿が、右の、

（消してやらう。）・・・・・は、横庄の耳には、燈を消してやらう、と、丁度、釣洋燈の上で聲がしたなり、然う思つたものと見える。

心は違ふが、お雪さんは、さ、其處どころではない。今の、聲で、目を見詰めたまゝ、横に倒れて、食切つても秘す筈の、其の何よ、指の血も、旦那の前へ、花の影の白魚と投げた。

嘘を吐け！ 爺、どんな風にお雪さんが倒れたやら、起きたやら、坐つたやら、貴様見て来たか、可い加減な、とおつしやるまいものでもない、はッはッはッ。

と又瘦せた胸を揺つて笑ひ、

「其處が、それ、映繪のお爺さん、恚うもあらうかと言ふ體を、今夜はな、口で饒舌つて御覽に入れ

た。話の筋道に形を付けたぢや。廊下も縁も、四ツ目垣も、して見れば道具立さの。

したが、此の話は實録ぢやよ、うむ、」

と一ツ合點んで、

「實録ぢや、が、處は前言つた竹町で、然る人の圍ひものゝ身にあつた、いや、現在にある事と言ふだけで、誰の事やら一向分らぬ。

處を、旦那は横井庄兵衛殿、婦人はお雪さんで話したは、當席へ出勤すると言ふに就いて、筋を判然と、つい掌を指すが如くに聞かせたいために、借りて用ゐたと思はつしやい。

飴屋如きが申しては、事も、烏漣がましようはござれども、狂言綺語の習なれば、お差合ひは御免あれさ。」「

と、誰にするやら、ぐつたりと頭を下げて、

「何處から聞いたと言ふなればぢや、天知る地知る、飴屋知る、……飴屋知る、……飴屋知る、……飴屋知る、……」

屋知るか、はッはッはッ。

いや、串戲はおいて、二晩目も、亦其れがために
醫者騒ぎぢや。

其の夜中にも、

（雪や、消してやろう、雪や消してやろう。）
と屋の周圍を廻つて鳴く、猫殿の聲を、・・・・。
實は旦那も聞いたと言ふわ。

子分身内を集めた處で、佐竹ヶ原へ陣太鼓で、猫
狩も出來ぬ始末。

内々は加持祈祷にも及ぶ由。

三日、四日、一昨日の晩、――昨夜も鳴く。
續いて鳴く、宵から暁方へかけて、

（雪や、消して遣らう、雪や消して遣らう。）
と幾度となく鳴いて廻る。裏悲しげに、情けなさう
に、然うかと思ふと翔るやうに、又慰めるやうに鳴

く。

何う鳴かうとも、猫がものを言ふ人の聲。聞く身
に取つて堪らうかい・・・寄席どころの沙汰で
は無い。

が、其れはしかし、餘所の話を、甚叟映繪の一幕
ぢや。

御心配は御無用。當席お目的の看板、清元雪江儀
は、下足番の三次骨折に因つて、今日より必ずとも
に、頓て出勤仕る、誰方も其れをお楽しみ、

と云つたが故とらしく聞えた。

「えゝ、御退屈。」

と又おじぎをして、甚叟けろりとした面を上げた。
ト其處へ、三次の突出した顔を見越すと、

「三ちゃん、今晚は。」

と云つて莞爾とした。

いや、三次が沸えまい事か。

「畜生、お雪さんの猫一件を饒舌りやがったな。」
 「眞個かの、三次。」と席亭は念入に又吃驚する。

「嘘だか、眞個だか、變な風説はするんですがね、何も高座へ持出さなくても可んでさ。爺め、何が氣に入らねえ。厭に面當がましくけちを着けやがつて、あの面色を御覽じろ。法外な日當で、酒で産湯を使つたんですせ。糟喰え生酔め。旦那、引摺下ろして打擲いて遣りませう。汝！」

「あゝ、これ、そんな事をしては、尚の事けちが着くがの。」
 で、木戸口で、暖簾に搦む手が四本、頭を上と下で、一揉み揉む。

高座の飴甚は何處を風が、と云ふ顔色で、目もくれず、……澄まして樂屋へ入らうとして、だらしない中腰で、樂屋を見込んで、

「幕を、幕を、」と云つたが、應ずるものなし。小僧ぐらゐは居たのであらうが、何んとしたか沙汰がない。

「安目に見るな。」

と額で睨んで、又莞爾つて、

「いや、何んの中でも藝人ぢや。出世前の若いものが、飴屋の幕は引悪からう。」と、のこ／＼と立つて引込む。

其の抜れた嘉平治の袴腰の工合では、ぐたりとしても萬歳扇とあらう處を、手拭を驚掴みで、

「どツこいしよ、」と一つ腰を掛けて、階子段の上口を塞いだやうな形をしたが、身體が隠れたかと思ふと同時に、勝手を覺えたか、幕がばたり。……七分處で息をついたやうに、一寸留まつて、舌を吐いた體にべら／＼と高座を搔消す。

寄席中雲が下つた如く、颯と、一時に陰氣が籠る。

「誰も居らぬが、」

と樂屋の中で、飴甚のぼやけた聲で、

「猫が一匹。」

と云つた。

「キヤー」

と茶番所で、女中がけたゝましい聲で叫ぶと同時に、

「わはゝはゝ。」と、天狗に紛ふ高笑ひをして、

どん／＼どろ／＼どろと水が出たやうな太鼓の音。

「猫が居ると云ふが、三次、」

と席亭は慌てた聲で、

「追出して来てくれぬかい。」

「チヨツ！ 可うがす！ 嘘だらうがね。」

「あゝ、これ／＼、喧嘩なぞせぬやうに、人聞が

悪いでの、頼んだよ、頼んだよ。」

暖簾を衝と半纏で潜つて、

「此處で、撲つたつてはじまりませんやね。」

と獨言した。……樂屋は正面の右の板戸、突當れば手が届くが、しかし下足番は作法を知つて、茶番の前を左へ廻つて、廊下をどしんどた／＼と烈しい足踏。……猫の居るが定なれば、此音で遁げる、らしい。餘り氣味の可さうな様子ではなかつたから。

「猫、猫、人間ぐらゐな大きな猫、はゝは、正六（西洋手品）さんの弟子が圓く成つて寝て居るんで。」

と横目で茶番所の女中に一寸斷るやうに言つて、三次が引返した時、席亭は堪へ兼ねたらしい風で、瀧と焼印の据わつた、革の緒の鐵と丈夫な古下駄を穿いて、白足袋で、軒下へ出て、悄乎と雨夜の路地口を見て立つて居た。

いや、又、可い加減に煮込んだ蠟燭は、こゝが身上と、ばた／＼煽るやうな盛り鹽梅。軒提灯の明いほど、人の影は、濕つた土間に黒々と照される。

角かどの其その氷店こほりみせの繁昌はんじやうさは、蒼味あをみを帯おびた雨あめの燈火ともしび
に艶々つや／＼と光ひかりを持もつて、緋ひの毛氈まつせんに、白しろい雪ゆき、話聲はなしこゑも
冴さえれば、匙さじの音おともさら／＼響ひびいて、沸立わきたつほどな
納涼すゝみの人数にんず。．．．．急きふに娑婆しやばが出來できたかとも思おも
はれ／＼ば、淺草あさくさが引越ひっこしたかとも疑うたがはれる。．．．
・下谷中したやぢうの祭禮さいれいを其その棧敷さじきで見物けんぶつする大おほきな劇場しばあ
かとも過あやまつほどな、此方こなたの寂さびしいにつけて、つく／
＼と、三次じも實際じつさい驚おどろいた、五月きつき闇やみも未まだ宵よひの口くち。

其その氷店こほりみせを、向むかうへ、大おほきな寺院じゐんめいた小學校せうがくかうの屋根やねを越こして、裏町うらまちあたりで、犬いぬの遠吠とほほえを聞きくやうな心持こゝろもちのする席亭せきていが、

「三次さんじや、」

「旦那だんな、」

と下足番げそくばんもしみ／＼言いふ。

「飴甚あめじんはの、」

「影かげも形かたちもありません、爺ぢいめ、取とつちめられるとも思おもつたでせう．．．．飴あめでも茶受ちやうけに置おいて行きやがりや可いいに、荷物にもつまで綺麗きれいに片附かたつけて、遁にけたらしいんです。」

「なあ、三次さんじ。」

「え、」

「清元きよもとの師匠しやうは、こりや來こないの、何どうも様子やうすが。又また、來きてくれぬ方ほうが可いいかも知しれぬ．．．．あれの、彼處あそこに、出だして置おく照てらしの提灯ちやうちんが、限かぎつて

消えて居ると言ふのも怪訝しい、と今も視めて居た
處よ。上には横廂の出た處、雨も漏るまい、・・・
・さして風もなし、何處に一つ齒の抜けた燈とて
見えぬものを。」
と溜息する。・・・

其れと云ふのが、角の氷店と向合つた路地口に、
合角の横手、羽目板の處を借りて、清元雪江、病氣
につき缺席の處、今晚より相違なく出勤仕候」と
して、其の出勤へ紅で圈點つけたは三次の才で。晝
間念を押して來てから、直ぐに大張紙に黒々と書い
た。其書いたのは席の娘のお園の手で、これは、同
じ貸屋札でも、女の字は縁が早いと、よく考へれば
縁起でもない事を擔いだもの。尤も言ふまでもない、
席亭の其れは案じ。で、明るい内から張出したが、
日が暮れると目印に、長提灯を明々と雨の中に照ら
したもので。

「なあ・・・氷屋さんとは夜と晝で、まるで
恚う、螢でも飛びさうに濡々として暗いがの。」

見れば、それ、彼處に立つて、張紙を透して居る人がある。・・・羽織が紋着らしいがの、此の邊では餘り見懸けぬ、何うやら他土地の仁のやうなが、矢張り雪江さんを、何んと、目當ではあるまいかい。

なまなか正に出勤とした處で、其の張紙が却つて白張のやうに見えては、嘘を曝しものにしたと同じで、誰も入らぬが。

何うもの、雪江さんを掛けたのが、何かの間違ひで、祟つたかとも思はれる。で、一層最う看板を下ろした方がと私は思ふがの。

考へて見れば、頸許で、何も彼も私が至らぬからよ。恚う成ると・・・極が悪いと言ふものを、何んのための手習だ、と叱つて、當節は行はれぬ、私等が少い時、寺小屋の席書の話まで持出して、張紙をかゝしたお園にも恥かしい。」

と歎息も愚癡に成つて十ウばかりも急に老込む。

見るが内にも曲りさうな腰を、両手で漸々と突張つたもので、青い息。

「えゝ！ 消えたら、點けるんです。人をつけ、お前さん、夏場ば此れからだあ。」

と棄鉢の大にいきつて、三次は草履のなりで小路を横飛び。

自棄に放火でもしさうな、燐寸が暗の中にひらめくと、見る／＼新しい火が長提灯をぽつと映すと、白い處に、艶々と雪江と、言ふ字も見えさうに成つた。

「一寸言つて置かねばならぬ。紋の羽織らし、と見た、其の男の姿は、三次の影と翻外と分れて、今は居らぬ。」

「ほい、ほい、」
の掛聲で、羽目傳ひに、引返す時の三次は、爪尖で泥濘を拾つて来る。

トまだ十足とは來なかつた。

席亭は其處に點れた、長提灯の明を見ると、フト
飴甚の話が、ちら／＼と蠟燭とゞもに瞬くばかり目
に映つて、上の屋根が、ぼんやりと暗夜の空に被つ
たゞけに、其處から、恚う、耳の生えた、髯の動く、
丸い顔が、見下ろして居さうでならぬ。

(雪や、消してやらう、) と思ひ出し
て、悚然とした、と殆ど同時。たたりと白のは雨
の脚、屋根の端から垂々と白粉でも溶かして流しか
けるやうなのが、長提灯に灌ぐと見ると、ジユウと
言ひさうにして、すうと消えて、張紙を嘗めて取つ
た、小路の片暗。

「三次、消えたかの。」

「えゝ！」

と下足番は振返つたが、何か考込むだやうで、羽目腰に附着いて、少時立つて居た。

が、然であるべきにあらざればで、今度は愚圖らと、疊んだ提灯の引立ち悪く、茶番の千崎禰五郎と云つた形で、小雨に蹲込んで蠟燭になすりつける。

今度は何うやら保つらしい。後を見ながら徐々と後戻りをして來たが、矢張不可い、これも寂滅。．．．．軒下へ歸つた頃、吸つて取つたやうに、上へフツと消えた。

席亭は、最う何も言はず、茫と成つた體で、踞跟々々引込んで、ひよつくり框へ腰を支くと、

「あゝ、」と言ふ大溜息。．．．．膝の上へ両手を投げて、ぐたりと抜衣紋に俯向いて居たが。

忽如、憤然として、しやつきり張つて、其處の板敷の傍に置いた、女隠居重代の手附の煙草盆を引立て、木戸看板の大人叶を、暗い面色で上から覗いた。・・・・

「しやい、しやいッ」

と尻上りに活かして呼んだ、下足番の聲に連れて、すつと土間へ入つた一人の客がある。・・・・もし此が無かつたら、席亭は矢庭に看板を吹消して、ぐわた／＼大戸を閉めたであらう。

後で氣が付くと、此の客は、例の路地口から入込んだのではない。裏の其の紺屋が物干にする廣場の突當りは一園の平長屋で、宵から燈さへ置かぬ、極々勝手を心得たものだ、危つかしい溝板を蜘蛛手に拾つて、三味線堀の方へ抜けられる、大溝の上に湧いたやうな長屋ばかり、――何處か其の方角から入つて來た。

唯見ると席亭は、吃驚したやうに居直つて、松の一番、と言ふ札を、カタンと其處で鳴らしたが、たゞ

馴れつこで我知らず遣つた……其の實は、此の位な事で看板を消さずに澄まさうとは思はなかつた。

「ちと、ものが承りたい。」

と落着いた低い聲して大儀さうに言ふ。……年紀も七十に近からう。白髪の總髪、淺葱色の帷子の五ツ紋着、羽織なしで、袴をきちんとした扮装。白麻の襦袢が透き／＼と、影は薄い、品の可い老人で。づしりと重たげに懷中を膨らましたのを、皺だらけの手で、と其の上を胸で壓へて、すつと袴腰が細く、曲りはせぬが、竹の杖を支いて居た。……さて最う高年の事で小兒に返つて、手遊でもぶら下げたか、身體の何處かで、カラ／＼と可愛らしい音をさす。

何か聲を掛けられたが、赫と逆上せて居る席亭の耳には、つい一度では入らないで、

（はあ、）と問ふ。

「あゝ、いや、些とものを尋ねたいよ。」

「えゝ、」

「別儀でもないが、當席へは、清元の師匠で雪江と申すが、出勤すると言ふが、眞個であらうかの。」

「出ますよ！」

と大きな聲して、三次が下足札を引扱く。

「すると間違なう、今晚も出勤するぢやの。」

「三次、」と呼んで、席亭は慌てた風で、暖簾の端の、此の時しも些と煽るのを、背筋で壓へるやうにした。透見をされると、客は一人も居ないから。

「確に出ます、お上んなすつて、」

「いや／＼。」

と大儀さうに、撫肩を斜に立直つて、吻と息を吐いて、

「見らるゝ通りの老人、耳も疎し、私が聞かうではなけれども、些と申附かつた事があつて、頼みに來ました。聞いてくれられさ。・・・」

老人召使はるゝ、御主人ぢやが、やがて女中ども

連れて多勢これへ見えらるゝ。

就ては些と異なる事のやうぢやけれど、

と、ものありさうに其の懷中を下目で見て、

「お待受けに一つ、これへ置いて貰ひたいものがあつての、異なる事と云ふのは其れぢやが、實は其の猫を一匹。」

と咳をした。

「怪訝な事に思はつしやらう。」
 と老人は、三次と席亭の顔色を左右に祀めて、

「何を秘さう、私が使はれます主人と云ふが、女性での、然る方のお部屋様ぢや。處が一向の世間見ず、恁やうな、わやくを申さるゝで老人實は迷惑いたす。つき／＼の女中たちも、人群集の寄席へなど、猫を抱いて供をするは難儀ぢや、と無理のない儀を言ひますの。雪江どのとやらの清元は斷つて聞きたし、然ればと云うて、手飼の猫を連れずには參らぬと、根がの、我儘ぢやが、又、妾てかけは、いづれ親、兄弟、家のため、言はゞ人身御供さの、心に染まぬ思をもさるゝ。御ふびんな様子もあるに因つて、些との氣保養はさせましたい。」

料金はなにがしなりとも進ずるで、こゝは平に御承引の下されい。」

で、條は通るか、通らぬか、老體の然も威儀の正

しいのに、事を分けて、談じられたので、席亭は遮つて斷りかねた。ばかりでなく、掠れ聲で、臃氣ながら、來歴のある印判を、びた／＼と、赤い舌で擦すやうな應接振に、氣を吞まれて、疾にも口は利けなかつた。

三次も目ばかり、まじ／＼で。

最う話は濟んだものにした様子で、

「聞濟みくれられて珍重ぢや、それ、お手飼はこれぢやよ。」

と、些とぶる／＼と震へる其の手で、壓へた胸の處を密と搔はだけるやうにしたかと思れば、するりと抜けて、ふはりと軽く、血の跡の斑に附いた絹の半巾とも思ふ、赤斑が、爪足を白く框へ支いたが、トンと言ふ音もせず、首玉のあたりが、カラ／＼と鳴るや否や、翻然と蝶のやうに暖簾を潜つた。

あつと云ふ隙もない。

三次も見たが、如何に飴甚の怪しげな話のあとで

も、其れを思出すほど目に餘るものではなく、實際
掌に入りさうな、小さな可愛らしい猫であつた。

片手で、すつと衣紋を合せて、

「よく、粗相の無いやうに言聞けて置きました

で、・・・女づれは追付け此れへ。然らば、」

と早や杖の尖が、びくと上る。

「あゝ、もし／＼」

と席亭が乗出して、

「貴方はお入りにはなりませんので、」

「いや、前申す通り耳も疎し、目も疎し、」と、

杖に両手を、胸で憩ひ、

「早や、恁やうな老人は、此方衆、人寄せの席で

は縁起でもありませんまい。それにな、恁やうな明る

い木戸とは違つて、暗い大きな門構への屋敷ぢや、

それ／＼に刻限も切れて居ります。」

と振向くと、軒の提灯を、成程、疎さうな目で見

上げた。其の時、さら／＼と白髪が揺れて、

「ほう、祭禮と見えて、生暖い風が吹く……
夢のやうに遠い昔を思出す……ヤ、犬が鳴く
の。」と、袴がぶる／＼。

「然らば、お暇。」

茫と成つて黙つて見て居た顔に靄の被つたやうな
三次が、

「お猫さん、」と云つて、獨りで苦笑ひして、
「猫ばかり居て何うなりますね。」

「さて、其の儀もよく申含め置きましたで、濫り
に何處へも驅出しませぬ、心配をなさらぬや
う。……おゝ、しかし歸つて確と申さう。念
のため、今の札を預つて参りたい、つい御近所ぢ
や、お部屋が見えられる時、お返し申す。」

と、下足札を、俯向けた掌で搔込むやうに、すつ
と取つて、……するりと土間を、後退りに軒
へ掛かる。

と祭禮の提灯が映つて、骨が背筋を透くやうであ
つた。

爾時そのとき、確乎しつぷと杖つゑを握にぎつて、札ふだを取とつて、表おもてを翳かざして、力ちからの入はつた聲こゑして、

「松まつの一いち。」

「松まつの一いち。」と、何故なぜか思おもはず釣つりこ込まれて、二ふた

人りが同音どうおんに返こたまがへし。

氣きが着つくと、淺葱あさぎの影かげも、白髮しらがも無ない。雨あめがしと

／＼、しと／＼、しと／＼。

「お父さん、お父さん。」

「あゝん。」

「今の方は葬禮の歸りぢや無くつて。」

と、客珍らしげに、暖簾の中から木戸を透かして居た、娘が云つた。

言はれて見れば、杖こそ青竹でも無かつたやうだけれども、紋着と言ひ、袴と言ひ、祭禮の風が生暖い處から、太く陰氣に悄れた様子が、如何にも喪に居る人らしかつた。が、聞くも忌々しいので、席亭は噉んで棄てる如く、

「馬鹿な事は言はんもの。」

と勿體らしく賤めた。……が、様子が怪しみに就けても、松の一番の客は？ 猫は？ 同じく飴甚の話を耳にした娘が、其處に立つて居た袖擦れに飛込んだのにさへ、聲も出さなかつたほどで、實際、何んの懸念も要らぬ、お手飼の毛色に相違ない。

が、入つて何處に居ると聞く、と娘は、唯今、ふツと飛込んだ時、はつと思つて客席の方へ目を遣つ

た拍子に、——樂屋に通ふ左の縁に、ずらりと立
廻はした障子の真中、左右へ横庄が肝入の今度の張
紙を張廻はして、一本黒々と残した柱に、席内屈竟
の装飾品として一面の姿見が掛けてある、と向ひ合
つた右の縁が、廁の通ひで、其處の障子は、濕氣除
兼帯と云ふ水溜に草花を見せた池らしいものがあつ
て、二三枚開放す、外の中庭の暗い夜が、其の姿見
に映つて、臙氣ながら、ばつと娘の目に着く途端に、
首玉の色の燃えるやうなのが映つた、と思ふ。・
・・大方庭へ出たのが、照返しに見えたのであら
う、・・・・何處も疊の上には居ない、と云ふ。

又庭へ出ぬまでも、一旦形が入つたら、其のまゝ
硝子の裏へ揉込みさうに、姿見の面はぶる／＼とし
たもので、是か、非か、庭の池の漣が自づからさら
／＼と映るのであつた。

「怪訝しいわね、お父さん。・・・・チヨ、チ
ヨ、チヨ、」と唇。
「怪訝しくない、」
と又叱つて、

「知らぬ場所に来たのだ。物蔭へ入つたのは當然だ。疊の眞中處へでも坐つて居りや、其れこそ怪訝い。」

「居なく成つたつて、先方が承合つたんです、構やしません。」
と三次が云ふ。

「チヨ、チヨ、チヨ、何んて言ふの。」
「齒磨の名でありますか。」
と、孤兒院が起立した。

「あら、ま、猫の事よ。……玉かしら。可愛らしい三毛だつたわね。」

「唯、尾の長いのであります。」と、孤兒院は細首を窺めたもので。

「しかし三次、……何んだらうの。」
「お部屋様だつて言ひましたぜ、華族です、何うしても。而して三太夫だね、ありや、奥何の御家老には、昔から、あゝした、血の蒼いのを選つたものでさ。女連れツさ、此一組でも勿ねますぜ、口明が

女大勢、今のは招猫つて言ふ景氣だ。縁起ものです
ぜ、旦那。乾坤享利、そら、御覽なさい。」

と言も訖らず・・・びた／＼と高く上つて、
濡れた跽音がしたかと思ふと、晃然と光つて、颯と
曳込む、磨骨の護謨輪が一臺。後壓に着いた、唇は
かり白い色して、顔中油墨の黒坊は、鍛冶屋の職人。
これが、雪と抜いた半纏は、横庄が出した揃いで、
中のは言ふまでもなく、雪江と分る。

三次見るより、ちやつと屈んで、桐油を外づすと、
悚然とする留南木の薫り。

車夫が、後へ母衣を刎ねた、濡れた黒雲を疊むと
見れば、露の垂りさうな柳髪、重げにしつとりと差
俯向いた、もれたる眉こそ美しけれ、頬の半ばを蔽
ふまで、雪なす手巾をさし當てたが、涙を包むとは
見えないで、色香こぼるゝ松の雨に、月のひそんだ
薄化粧。

【三味線堀前編・完】